
もう1つの智代アフター

坂上智代は俺の妻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう一つの智代アフター

【NNコード】

N8763M

【作者名】

坂上智代は俺の妻

【あらすじ】

CLANNAD—次創作

オリジナルキャラ紹介と注意事項（前書き）

俺と坂上智代の出会い、今を描いた作品です。
最初に注意事項を書きましたので読む前に注意事項を見てください。

オリジナルキャラ紹介と注意事項

【CLANNAD】もう一つの智代アフター

注意事項

原作の設定と違う箇所や、実際の設定と異なる箇所が多くあります
が、それは物語の構成上の問題です。

岡崎でなくぐっち（俺）というオリジナルキャラが主役です。
そう言ったモノを受け付けない方はスルーしてください。
以上を了承した上でお読みください。

設定

名前：ぐっち

性格：ヘタレ、変態、オタク

職業：高校1年

家族構成：父、俺

その他：幼い時に母親を亡くしている。母が亡くなつた理由は不明。
今は父と二人暮らし。父が転勤の多い職についてる。父との仲は最
悪。転校が多いので臨機応変スキルが高い。

オリジナルキャラ紹介と注意事項（後書き）

まだ続きます

First Contact

俺は属に言つアーメオタクといつヤツだ。世界の汚さと、平凡な日常に退屈していた。

だから現実と違い綺麗で非日常的な一次元に憧れ、アニメオタクになつたのは必然と言えるだろ？

現実に魅力あるモノなど存在しないと思つてた。彼女に会つまでは……。

今日は× 高校の入学式だ。

息を切らせながら、学校に向かう途中にある坂道を上る。

「！？」

絶世の美少女と言つても過言ではない美少女が物思いにふけつてたたずんでいる。

桜舞う並木道に絶世の美少女。すゞく絵になつていた。

俺はその美しさに心奪われてしまつ。彼女と一緒に居れたら世界が色付くと思った。

だから、俺は……。

「好きです。一日惚れしました。俺と付き合つてください」

思わず告白してしまう。別に見返りなど求めてない。

ただ、俺の気持ちを迷惑かも知れないが彼女に伝えたかった。返事など貰える訳がないと思つ。どう考へても無視されて終わり。しかし彼女は……。

「なつ！？」

酷く驚いた表情をしている。もしかして脈あり！？

「……すまない。そういうのは興味ないんだ。他を当たつてくれ」

無視されて当然なのに返事をしてくれた。その優しさで俺は更に彼女が好きになつた。

だから、俺は……。

視点変更

中学時代の私は荒れていた。目に映る全てが憎かつたんだ。毎晩、出歩き不良相手に喧嘩をして鬱憤をはらしていた。いや、喧嘩というのは少し違うか……私が一方的に殴つただけだからな。最低な姉だつたと思う。でも、弟のお陰で立ち直ることが出来た。しかし、そのせいで弟は……。

私が考えごとをしていると、今まで感じたことのない視線を感じた。

その視線を辿ると冴えない男子生徒がいた。

制服を見るに私と同じ新入生だらう。

男が私に近付いてきた。

またか……正直うんざりする。だが、これは自業自得だ。全ては過去の私が起こしたことが原因だからな。

私は何時でも蹴れるように右足に神経を集中させた。

「好きです。一日惚れしました。俺と付き合つてください」男の行動は私の予期したものと全く違っていた。

「なっ！」

生まれて初めての告白。ラブレターなら貰つたことがあるが直接言われたのは初めてだつた。だから少しだけ動搖してしまう。

男は小刻に震えていた。勇気を振り絞り私に告白したのだらう。見ず知らずの相手ではあるが誠意に誠意で返すべきだらう。「すまない。そういうのは興味ないんだ。他を当たつてくれ」だから、無視でなく返事を返すことにした。

このせいで私の人生が大きく変わることになるとは誰が想像出来ただろうか？

初恋と初恋？（前書き）

桜舞う景色の中で俺は彼女と出会った。彼女は美しい、その美しい言葉で言い表せない。あえて言ひなれば「アルキリー？」

彼女に出会えたことは奇跡と言つて……。

? 「奇跡は起きないから奇跡って言ひつて下さいよ」

(・・・) ショルーン

初恋と初恋？

こんな気持ちを感じたのは産まれて初めてだ。三次元に絶望して二次元に逃げた時に俺は三次元を捨てた。

三次元の優しさの裏にある汚さの打算や裏切りなどにうんざりしたからだ。世界は汚い、かくも醜い。三次元は灰色に染まつっていて退屈だ。

その逆に一次元は打算や裏切りなどないし、俺にとつて理想郷だつた。一次元の世界は美しい、かくも素晴らしい。色々な色彩で彩られた世界。

それなのに、俺は今日三次元で一次元ですら感じたことのない感覚を感じた。

「すごく綺麗な女の子だったな……。あんな美少女が三次元に居るなんて……」

桜舞う並木道で出会った美少女。桜舞う中に一人物思いにふける美少女、その絵が凄く幻想的で美しかった。そして俺の心を一瞬で奪つたんだ。

名前は……わからない。次また出来たら聞いてみよう。

そして俺は彼女の彼氏になりたい。……いや、どんな手段を使つても彼女が欲しい。

だが、彼女の意思を無視したやり方は駄目だ。催眠、脅迫など論外だ。

彼女の今まで手にしなければ意味がないし、そんな手段を使ったら彼女に嫌われてしまう。

相思相愛の関係になりたい。そうなると手段はかなり限られる。俺は……。

どうすれば良いんだ？ 生憎と女性と交際したことは元より、恋愛経験すらない。

「……ググるか」

俺はパソコンの電源を入れて「彼女の作り方」でグーグル検索することにする。

ラブレター。手紙で想いを伝える方法。

「彼女はそういうの好きじゃなさそうだな……」

脅迫。相手の秘密を調べて、それをネタに交際を迫る。

「犯罪とかワロス、ワロス。通報しますた」

催眠術。催眠術で相手を操る。

「操り人形は要らない。生身の彼女でなければ無価値だ」
グッズ。恋愛運があがります。

「そんなオカルト有り得ません！」

良いのがないな……。諦めて寝ようとした瞬間ある文字が目に入つた。
それは……。

視点変更

入学式を済ませた私は病院に行く。ある人物のお見舞いをするためだ。

私のせいで大怪我をしてしまったと言つても過言ではない。

その昔、家族の仲が悪い四人家族（父・母・姉・弟）が居た。父親は浮気ばかりしていた。母親は母親で父親への当て付けが同様に浮気していた。姉は苛立ちを弟にぶつけて暴力を振るうこもあつた。
……弟に暴力を振るうなんて最低な姉だと思う。

そして遂に家族の我慢は限界を越えて、終焉の時を迎える。

だが、家族が終焉の時を迎えることはなかつた。弟の犠牲により
……。

弟は唯一家族の大切さを理解していた。家族に家族の大切さを教えるために弟は車道に飛込んだ。

失う恐怖を味あわせることにより、家族の大切さを理解させる作戦だつたらしい。

酷く愚かな作戦だ。だが、一番愚かのはそんな作戦を取りざるを得ない状況にしてしまった家族だ。

家族は弟の犠牲により家族はやり直す機会を得れた。

父親と母親は不倫を辞めて、家族を大切にするようになる。姉は不良狩りを辞めて、夜の道をさ迷うこととはしなくなった。

本当に私は最低な姉だと思つ。

私は入室の許可を得るため、個室のドアを叩く。

「どうぞ」

私はドアノブを回して押した。中学生くらいの男子がベットに居た。男の名前は「坂上鷹文」^{さかがみたかふみ}という。私の弟だ。

「調子はどうだ？」

「特に問題ないよ。姉ちゃんもわざわざ見舞いに来なくて大丈夫だから

「そんな訳にはいかない」

鷹文がこうなつてしまつたのは私が原因でもあるのだから……。
「本当に大丈夫だからさ。そんなんじや彼氏とか出来ないよ」

「彼氏？ 別に興味ないな」

いや、それは嘘か……少しばかり興味がある、私も女の子だからな。だが、鷹文がこんな状態の時にそういうたつわついたことは考えたくないし……できない。

「……もしかして责任感じてるの？」

「そ、そんなことはないぞ」

団星だった。

「僕、嫌だよ」

「何がだ？」

「僕のこと気にして彼氏作らないとかだよ。姉ちゃんには幸せになつて欲しいんだ」

「……そんなの出来る訳がない。私だけ幸せになるなんて……。

「……」

「ハア……彼氏が出来るまで姉ちゃん見舞い禁止ね」

溜め息を吐きながら、とんでもないことを言ひ鷹文。

「な、それは横暴だぞ」

「姉ちゃんは美人だから直ぐ彼氏出来るよ」

うん、実は容姿だけなら自信がある。……つて、今はそんな話して居ない場合じやないな。

「好きな人が居ないんだが……」

「じゃあ、気になる人は？」

「……居ない」

嘘だ。本当は少しだけ気になる男が居る。今朝あつた変な男が浮かんだ。でも、恋愛感情は全くないぞ。

「嘘だね。姉ちゃん、嘘付くと田が泳ぐもん」

私にそんな癖があつたなんて知らなかつた……。

「うつ……だが恋愛感情は全くないぞ」

「とりあえず付き合つてみれば？」

「それは相手に失礼だろ？」「

「じゃあ、見舞い禁止ね」「

「うつ……それは困る」「

……私はどうすれば良いんだ。

「面会時間終了です」

看護士さんが面会時間の終了を知らせる。

「……」

見舞い禁止を受け入れる訳にはいかない。……あの変な男と交際するしかないのか。

だが、交際と言つても今日振つたばかりなのだが……。それなのに私の告白を受け入れてくれるだろうか。うう……私はどうすれば良いんだあ。

僕は病院の個室のベットの上に居る。足の治療のために入院している。この程度の怪我で済んだのは医者曰く奇跡らしいね。

「……言つと軽い怪我に聞こえるかな？ 怪我だけのことを言つながら軽くない、寧ろ重い方だとと思うよ。

僕は車道に飛込んだんだ。命すら失つてもおかしくはなかつた。酷く愚かな行為だと、僕自身も理解していた。でも、僕にはその手段しか残されていなかつたから……。

結果、僕は車に跳ねられた。医者の迅速な対応により命は助かつたけど……複雑骨折の全治一年という大怪我をしてしまう。沢山の人達に迷惑をかけたことは反省している。でも、後悔はしないよ。……例えこの命を失つても構わなかつた、それで家族を守れるなら……。

アイツらには悪いことをしたと思うけど……。もう、僕は大好きな彼女と会つことは許されないだらつ……。それだけのことをしたのだから……。

個室のドアを叩く音が聞こえる。また、姉ちゃんかな？

「どうぞ」

やつぱり、姉ちゃんだった。

「調子はどうだ？」

「特に問題ないよ。姉ちゃんもわざわざ見舞いに来なくて大丈夫だから」

姉ちゃんは頻繁に僕の見舞いに来てくれる。もしかして責任を感じてるのかな？……別に姉ちゃんは悪くないのに……。

「そんな訳にはいかない」

「本当に大丈夫だからさ。そんなんじゃ彼氏とか出来ないよ」

「彼氏？ 別に興味ないな」

「……もしかして責任感じてるの？」

姉ちゃんの重荷になりたくなかつた。姉ちゃんには高校生活を満喫して、幸せになつて欲しいんだ。

僕は車道に飛んだんだ。命すら失つてもおかしくはなかつた。

「そ、そんなことはないぞ」

姉ちゃんは視線を泳がせた。「これは姉ちゃんが嘘をつくときの癖だ。

「僕、嫌だよ
何がだ?」

「僕のことを気にして彼氏作らないとかだよ。姉ちゃんには幸せになつて欲しいんだ」

「……」

姉ちゃんは頑固だからな……。だから、僕は強攻手段に出る。
「ハア……彼氏が出来るまで姉ちゃん見舞い禁止ね」

彼氏が出来れば僕のことを忘れて、高校生活を満喫出来ると思つたんだ。

「な、それは横暴だぞ」

「姉ちゃんは美人だから直ぐ彼氏出来るよ」

弟の顛履目なしでも姉ちゃんはかなり美人だと思つ。性格はアレだけど……。

「好きな人が居ないんだが……」

「じゃあ、気になる人は?」

「……居ない」

また、視線が泳いだ。へえ~、気になる人は居るんだ……。姉ちゃんが気になる人ってどんな人かな? 凄く会つてみたいや。

「嘘だね。姉ちゃん、嘘付くと目が泳ぐもん」

「うつ……だが恋愛感情は全くないぞ」

「とりあえず付き合つてみれば?」

「それは相手に失礼だろ?」

姉ちゃんみたいな美人と付き合えるなら、それだけで満足じやないかな?

「じゃあ、見舞い禁止ね」

「うつ……それは困る」

「面会時間終了です」

看護士さんが面会時間の終了を知らせる。

姉ちゃんは無言で部屋を出る。

姉ちゃんが気になる人ってどんなイケメンかな？

とっても楽し

みだよ。

初恋と初恋？（後書き）

私の駄文を最後まで読んで下さりありがとうございます。
続きを読むで書きますので良かつたらまた読んで下さい。
気軽に感想・アドバイスなど頂けたら幸いです。

偽りの関係

俺は昨日より早く家を出た。例の彼女を待ち伏せするためだ。そして再度、告白する。

昨日と同じように息を切らせ、坂道を上る。やっぱり徒步は辛いな……せめて自転車が欲しい。そんな下らないことを考えながら坂道を上りきると……。

「あっ」

昨日と同じ場所に彼女が居た。

「……」

彼女と目線が合つ。彼女は何故か頬をりんごのように赤く染めている。

「おはよう

とりあえず挨拶をすることにした。

「……おはよっ」

彼女は戸惑いながらも挨拶をする。何か様子が昨日と違つ氣がする。気のせいかな？

もしかして脈あり？ ははは……まさかね。でも、俺は付き合つてもらえるまで諦めないと。

昨日ググッタサイトに恋愛の秘訣は「諦めないこと」あったからな。

昨日の失敗はいきなり告白したからだらう。だから、先ずは世間話から……。

「実はお話がありまして……今、時間大丈夫ですか？」

「……あなたに話したいことがあるのだが少し時間を私にくれないか？」

二人の声が重なる。

「あ……先にどうぞ」

「いや、私の用事はそんなに大したことじゃないから……先にあな

たから言つてくれ

お互に譲り合つ。これじゃあ、ラチがあかない。しかも、時間は限られている。学校をサボる訳にはいかないからな。

「ここはレディーファーストってことで」

「そうか……なら」

そう言つて彼女は俺の提案を受け入れた。

「その……実は……って、やっぱり言えない……！」

突然、顔面に今まで感じたことのない痛みが襲う。この痛みは言葉で表せない。そして俺の体が宙に浮かび一瞬だが地上の者でなくなつた。

「つ……」

俺は彼女に殴られたのだとやつと理解した。普段なら痛みで情けない声をあげて泣いだらうが……彼女に情けない姿を見せたくないから我慢した。

「何で俺は殴られたの？ 意味がわからない。

「すまない。つい……」

彼女はすぐ申し訳なさそうな顔をして謝罪した。

「……大丈夫だから」

ヘタな俺だけど精一杯強がつて笑つてみせた。彼女に悲しみは似合わないから。

「そうか……良かつた。……やはり、私の話は少し言い辛いことだからあなたから先に話してくれ

「わ、わかったよ」

もう殴られたくないし……。

とりあえずどうでも良い世間話をした。彼女は真面目に俺の話を聞いて、時折相槌を打つてくれた。

結構良い感じ？

「今だ告白しろ！」

「まだ早いです」

脳裏に天使と悪魔が浮かび、争いを始めた。俺は……。

「昨日振られたけどやつぱり諦められません。簡単に諦めるような告白なんてしませんし……。その……俺と付き合つて下さい」

悪魔が勝利した？

「……突然が駄目でしたら先ずは友達からでも……」

「この台詞は聞こえないように小声で言つた。ヘタレスキル発動である。

「……ああ、私で良ければ構わないぞ」

「うんつてイイエつて意味でしたよね？　まさかの回答に頭が回らなくなる。

「やつぱり……駄目か。でも、俺は諦めないから！　君の気が変わるもので待つよ」

駄目「元の告白とはいえ、やはり振られるのは辛い。俺は涙が出そうなのを我慢した。彼女にみつともない姿を見せるのは嫌だから。

「いや……あなたは何を言つてるんだ？　私は承諾したじゃないか。

……もしかして、私をからかつたのか？」

何故かドス黒いオーラを感じる。もしかして死亡フラグ？

「いや、俺は本気さ。……つて、……まさかOKなの！？　俺の恋人になつてくれるの？」

「……さつきからそう言つてるじゃないか」

彼女は呆れた感じで俺を睨む。

「ごめん。……まさかOK貰えると思えなくて……。これ夢じゃないよね？」

彼女が俺の頬を突然つねつた。

「何？」

「痛いだろう？　なら夢じやないぞ」

彼女はそう言つて微笑んだ。その笑みは天使のように可愛い。可愛い、凄く可愛い。こんな可愛い娘の彼氏になれるなんて俺は世界の幸せ者だ。

「……今更かも知れぬけど名前教えてくれないか？」

「本当に今更だな。普通順序が逆だらう。それに名前を聞く時は先

ず自分から名乗るのが礼儀じゃないのか？」

彼女の言う通りだ。名前も知らずに彼氏彼女になるなんて聞いたことがないし、これから先も聞くことがないだろう。

「ごめん、俺の名前は朝倉ぐっち

「私の名前は智代。坂上智代だ」

智代って言うのか……。外見と同じで可愛い名前だな。

「呼ぶ時は何て呼べば良い？」

「智代で構わないぞ。私もぐちりって呼ぶからな」

呼び捨て許可来たー！ でも、ちょっと恥ずかしいな。

授業開始5分前のチャイムが聞こえた。

「じゃあ、改めて……その、よろしくな。智代」

「うん。……今日学校終わったら私と一緒に歩いて貰いたい場所があるんだが……」

「別に構わないけど」

「そうか……良かった。放課後迎えに行くからそれまで待つていて欲しい

「了解」

あれ、呼び返してくれないのか……。やっぱり智代も恥ずかしいのかな？ それよりデート楽しみ。

こうして俺と智代は他人から恋人の関係に変わった。嬉し過ぎて

今夜は興奮して寝れないかもしれない。

視点変更

私は昨日より早く家に出た。鷹文に言われたことを実行するためだ。

はつきり言って彼に恋愛感情は全くない。しかし、鷹文に言われたから嫌々と言つ訳でもない。

……私を女の子として扱ってくれて嬉しかった。荒れてた中学時代のせいで私のことを女の子として扱ってくれる人間は皆無に等

しい。少なくとも地元には居ない。

だが、これは自分でしたことが原因だ。つまり、自業自得である。だから、私を女の子として接してくれたのがすぐ嬉しかった。だから、彼を選んだ。

昨日と同じ場所で名前も知らぬ彼を待つ。彼は私の告白を受け入れてくれるだろうか？ 一度振られた相手から告白なんて怪しまれてしまうんじゃないか？ 色々な不安が脳裏に浮かぶ。すごく不安だ。

「あっ」

疲れた顔をして坂を上る彼が私の視界に映る。

「……」

彼と視線が重なる。まだ心の整理出来てないのに……。

「おはよっ」

彼が私に挨拶をしてきた。

「おはよっ」

私は動搖を抑えながらも挨拶を返した。

「……あなたに話したいことがあるのだが少し時間を私にくれないか？」

「実はお話がありまして……今、時間大丈夫ですか？」

二人の声が重なる。

「いや、私の用事はそんなに大したことじゃないから……先にあなたから言つてくれ」

「あ……先にどうだ」

またふたりの声が重なる。お互い譲り合いつ。気まずい空気が流れれる……。

「……」
「……」

「そうか……なら

まだ心の準備が出来てないが……この気まずい空気を何とかしたい。私は彼の提案を受け入れる。

「その……実は……って、やつぱり言えない……」

こんな恥ずかしいなこと言えるかあああー————！
私は恥ずかしさに耐えられず彼の顔面を殴つてしまつ。

「つ……」

彼は殴られた襲撃で宙を飛び桜の木にぶつかる。

「すまない。つい————」

また……やつてしまつた。

「……大丈夫だから」

彼は目に涙を浮かべながら瘦せ我慢をする。……卑怯かも知れないが私はその優しさに甘えることにした。

「そうか……良かった。……やはり、私の話は少し言い辛い」とだからあなたから先に話してくれ

「わ、わかったよ」

彼は突然、世間話をし始めた。何故このタイミングで？ 疑問におもいながらも彼の話を黙つて聞いた。

「昨日振られたけどやつぱり諦められません。簡単に諦めるような告白なんてしませんし……。その……俺と付き合つて下さい」

意味が良くわからない告白をされた。だけど都合が良かつたから受けることにする。

「……ああ、私で良ければ構わないぞ」

「やつぱり……駄目か。でも、俺は諦めないから――君の気が変わるもので待つよ」

…………もしかして彼は病気なのか？ 彼の言おうとしていることが全く理解出来ない。

「いや……あなたは何を言つてるんだ？ 私は承諾したじゃないか。
…………もしかして、私をからかつたのか？」

…………もしかしてからかわれたのだろうか？ 酷い、酷すぎるぜ。こんな嘘は悪質すぎる……。

「いや、俺は本気さ。……って、……昔さかのくなの！？ 俺の恋人になつてくれるの？」

どうやら彼は日本語が駄目らしい。

「……やつからそう言つてるじゃないか」

「じめん。……まさか〇×貰えると思えなくて……。これ夢じゃないよね？」

私は彼の頬をつねつた。私を不安にさせた仕返しだ。次はないからな……。

「何？」

「痛いだろ？ なら夢じゃないぞ」

「……今更かも知れないけど名前教えてくれないか？」

「本当に今更だな。普通順序が逆だろ？ それに名前を聞く時は先ず自分から名乗るのが礼儀じゃないのか？」

「じめん、俺の名前は朝倉ぐっち

「私の名前は智代。坂上智代だ」

ぐつちつて言つのか……あだ名みたいな名前だな。

「呼ぶ時は何て呼べば良い？」

「智代で構わないぞ。私もぐつちつて呼ぶからな」

同じ年だから普通に呼び捨てで構ないと思つたのだが……わざわざ聞くほどのことなのだろうか？

「じゃあ、改めて……その、よろしくな。智代」

何故か照れる、ぐつち。何か恥ずかしいことでもあつたのだろうか？

「うん。……今日学校終わつたら私と一緒に行つて貰いたい場所があるんだが……」

彼氏を作るのは鷹文を安心させて、見舞い禁止を解いて貰うのが本当の目的だからな。ぐつちには悪いが……。

「別に構わないけど」

「そうか……良かつた。放課後迎えに行くからそれまで待つていて欲しい」

「了解」

こうして私とぐつちは他人から恋人になってしまった。やはり恋愛感情もないのに付き合つのは失礼だと思う。でも見舞い禁止を解

くためだから仕方ない。勿論、ぐつちを好きになるよう努力するつもりだ。

私のせいでは弟は入院したのだからどんなことをしても償なわなければならないんだ。そのためなら私はどんなことでもすると誓ったのだから……。

卑怯者

放課後。普段なら家に帰るが智代と約束したから帰らずに学校に残っている。

付き合つて直ぐデートするのは少し早い気がするけど……智代とデート出来るならそんなことは些細な問題だ。

智代みたいに可愛い女の子とデート出来るなら男なら誰でもそう思うに違いない。しかも、俺は三次元で女の子とデートした経験はないから尚更だ。

でも、行き先はやはり男が決めるべきだよな。時代錯誤な考え方かもしれないけど男が女にリードされるのはカッコ悪いと思つ。

「ぐつち、待たせてすまない」

智代が俺を迎えてきた。

「いや、そんなに待つてないから大丈夫。それに終わり時間は先生次第だから智代が気に病む必要はないよ」

「そうだな。早速だが行こうか」

リードするのは男の仕事だよな。

「そうだね。とりあえず商店街にでも行つてみないか?」

商店街に行けば映画館や喫茶店などのデートスポットが沢山ある。「すまないが……行きたい場所があるんだ。ぐつちも私と一緒に来て欲しい」

行きたい場所があるならリード出来なくとも仕方ないな。

「良いけど……何処に行くの?」

「あまり時間がないから移動しながら説明したい」

急ぎの用事なのか……いつたい何なのだろうか。想像すら出来ない。

「わかった。移動しながら説明してくれ」

俺達は学園を出る。

「何処に行くの?」

「病院だ」

誰かの見舞いだろうか？ それとも智代は持病持ちでその診断をして貰いに行くのか。しかし、俺がついて行く意味はあるのか？

「何のために？」

「……私の大切な人が入院してるんだ」

……え？ 大切な人って……まさか彼氏？ そりや、こんなに可愛いだもの彼氏の一人や一人居ても不思議はないよな。寧ろ居ない方がおかしい。……なら、何で俺の告白を承諾したんだ？

……浮気相手ってことなのか？ 浮気は良くないことだ。でも、俺はもう智代なしでは生きていけない。俺はどうすればいいんだ？

「着いたぞ。ここがそうだ」

どうやら田的だに着いたみたいだ。病院に入り、智代は個室のドアを叩いた。

「どうぞ」

中から声がして入室を許可した。

「俺は外で待つてた方が良いよな？」

トラブルはなるべく避けるべきだらう。

「いや、一緒に来てくれ

……大切な人とは元カレで今カレを使って別れる作戦なのか？

なら……。

「智代は俺が幸せにするから安心しろ。だから、早く智代のことは忘れてくれ」

俺は中に居る男に告げた。男というよりは男の子が妥当かも知れない。多分まだ中学生くらいだろう。智代はショタ趣味だったのか

。

。

「へ？」

「は？」

彼と智代は「何言つてんのこの人？」と、いつた感じで呆れた顔をしている。

「えーと、君は智代の元力レなんだよね？」

「……いや、ただの姉と弟ですよ」

彼は必死に笑いたいのを耐えてる。

「……マジ？」

この程度の失敗は誰にでもあるよな、人間だもの。

「ああ、鷹文は私の弟だ。というよりどうすればそんな間違いをするんだ？」

穴があつたら入りたいとは正にこの状況だろ？

「智代が大切な人って言つから……」

俺は悪くない！

「大切な弟だ」

「いやあ

大切と断言する姉と照れる弟。とりあえず「ラコン」と「システム」のは間違いないな。

「どうせ、俺は馬鹿ですよ」

その馬鹿さつぱりはDQNも裸足で逃げ出すくらいや、多分。

「ああ、それは間違いない」

「うん、そうだね」

肯定する一人。少しばはフオローリしてくればよ。恋人なんだからさ……。

「姉ちゃん、変わった趣味してるんだね。姉ちゃんは面食いだと思つてたからちょっと意外だよ」

……「どうせ不細工」ですよ。ああ、産まれてから一度もモテた経験ないさ。悪いかよつ！ イケメン爆発しろ！

「うん、自分でも何故ぐつちを選んだのかはわからない。顔だつてイマイチだし、名前以外はほとんど何も知らない相手だからな」だよね……。本当に謎だよ、何で智代は俺なんかと……。

「……僕が彼氏作れって言つたからなの？ 姉ちゃん自身は……。それなら無理に……」

ん、どういう事？ 彼は意味がわかんないことを言つた。いや、

この言い方は違うか……。

幾等、馬鹿でもこの告白を受けたのは裏があると氣付く。ただ、その可能性を認めたくないで……口を氣付かないふりしていただけだ。

「……確かにそれもある。でも、それだけじゃない」
「どんな理由があるの?」

彼は智代に質問した。とても真剣な口をしてくる。

智代は俺の方を向く。

「……少し席を外してくれないか。お前には聞いて欲しくないんだ。
……時が来たら説明するから、今は……」

いや、それは……。だが、理由を聞いたら智代との関係が終わってしまう気がする。

卑怯かも知れないけど壊れるくらいなら偽りの関係を選びたい。
だから、俺は……。

「わかつたよ。外に出てるから話が終わったら呼んでくれ」

「ああ」

俺は外に出る。

時の流れが遅く感じる。楽しいことがあると時間の流れが早く感じて、退屈だと時間の流れが遅く感じる現象効果だろうか?

実際は場所により時の進む早さが違うなんて有り得ないことだ。
時差により時間は狂うが、時の進む速度が変化してる訳ではないからな。

ならば何故、時の進む速度に変化があるように感じるのだろうか?
? それはテンションにより感受性が変化するからだ。

などと、いい加減なロジックを組み立てたら……。

「終わったぞ。もう入って大丈夫だ」

智代が呼びにきた。

中に入ると、先程までの変な空気が嘘のように晴れてる。

「そう言えば自己紹介がまだだったよね。僕は姉ちゃんの弟で鷹文
つていうんだ。よろしくね、ぐっち兄ちゃん」

自己紹介する鷹文。結構、気安い感じなんだな。智代とは正反対な感じがする。

「自己紹介されたら自分もしないとだよな。」

「俺は……」

「良いよ、姉ちゃんと聞いたから」

どんな紹介されたんだろうか……。井あ、紹介済みなら良いか。

「面会時間終了ですよ」

看護婦さんが……あ、この方に方は黙田なんだったな。理由は知らないけど。訂正、看護士さんが面会時間の終了を知らせる。

俺達は病院を出る。

「……」

気まずい雰囲気。わかつては居たけどやっぱショックだ。智代は俺のことが好きじゃなくて鷹文に言われたから付き合つてるだけという、裏を知つてしまつたから。

「理由を聞かないのか?」

沈黙に耐えきれなかつたのか、智代が俺に話かけてくる。

「言いたくなさそだから、……無理に聞くつもりはない」

「これは嘘だ。本当は単にこの関係が壊れるのが怖いだけだ、例えこれが偽りだとしても……」

「そうか……。でも、これだけは言わせてくれ。確かに鷹文に言われたからお前の告白を受けた。お前に對して恋愛感情は全くない」
「ははは、やっぱりそつなんだ。肯定して欲しくなかつたな。
もわかつている」

「……」

本当は男なら言つべき言葉があるんだろつ。でも、それを言つたら終わつてしまつ。だから無言を選択した。

「……すまないこととしたと思つ。謝つて許されることがじやないのもわかつている」
「……終わりだ。もう止めてくれ。わかつたから、これ以上は聞きたくない。」

「……いや、偽りの関係でも恋人になれて嬉しかったよ。だから、気にしなくて良いから……」

田に熱いものがこみ上げてくるけど必死に我慢した。ここで泣いたら惨めすぎるから……。

「……許してくれるのか？ こんな酷いことをしたのに……。優しいんだな。なら、私もお前のこと好きになるよう努力する」

智代は握り拳をつくり小さくガツツポーズをした。

え、好きになる？ もしかして……。

「俺達、別れるんじゃないの？」

智代は肩を落として、落胆する。

「……ぐつちは私と別れたいのか？」

智代と交際続けられるなら、俺は例え悪魔にだつて魂を売る。世界中全てを敵に回しても構わない。

「別れたくない！」

「そうか……良かった」

愛していないという相手と付き合うのはおかしいと思つ。だが、そんなんのは些細なことだ。智代と別れることに比べたら……。

プライド、何ソレ食えるの？

視点変更

放課後。HRでの先生の話がとても長く予定したよりかなり時間が経過してしまった。

ぐつちは待つて居てくれるだろうか？ 不安な気持ちを胸に抱きながらぐつちの待つ教室へと急ぐ。

「ぐつち、待たせてすまない」

良かつた、待つていてくれた。

「いや、そんなに待つてないから大丈夫。それに終わり時間は先生次第だから智代が気に病む必要はないよ」

それはそうだが、待たせてしまったことには変わりない。でも、

ここにそれを論議する時間はない。だから、ぐつちの優しさに甘えることにした。

「そうだな。早速だが行こうか」

「そうだね。とりあえず商店街にでも行つてみないか?」

ぐつちが私に提案した。

「すまないが……行きたい場所があるんだ。ぐつちも私と一緒に来て欲しい」

ぐつちは残念そうな顔をした。そんなに商店街に行きたかったのか……申し訳なくて少し胸が痛む。

「良いけど……何処に行くの?」

「あまり時間がないから移動しながら説明したい」

「わかった。移動しながら説明してくれ」

私達は学園を出る。

「何処に行くの?」

ぐつちは再度質問した。

「病院だ」

「何のために?」

「……私の大切な人が入院してるんだ」

何故かぐつちは肩を力なく落として、今にも泣き出してしまいうな顔をする。

少し気になるが今は時間が惜しい。

病院に到着する。

「着いたぞ。ここがそうだ」

私達は病院に入る。私は個室のドアを叩いた。

「どうぞ」

中から鷹文の声がして私達の入室を許可した。

「俺は外で待つてた方が良いよな?」

それは困る。一緒に来て約束を果たしたことを証明しなければ私は鷹文の見舞いが出来ないからな。

「いや、一緒に来てくれ」

ぐつちは複雑な顔をした。

「智代は俺が幸せにするから安心しろ。だから、早く智代のことは忘れてくれ」

ぐつちは病気なのだろうか？ 私にはぐつちの思考が理解出来ない。

「へ？」

鷹文は「何言つてんのこの人？」と、いつた感じで呆れた顔をしている。同感だ。

「えーと、君は智代の元カレなんだよね？」

ただの弟だ。

「……いや、ただの姉と弟ですよ」

鷹文は必死に笑いたいのを耐えてる。

「……マジ？」

ぐつちは私の方を向いて、私の田を見つめる。

「ああ、鷹文は私の弟だ。といつよつどうすればそんな間違いをするんだ？」

説明を聞いても理解出来ないと思つがな。

「智代が大切な人つて言つから……」

「大切な弟だ」

「いやあ」

鷹文は何故か照れた。

「どうせ、俺は馬鹿ですよ」

床にのの字を書いていじける、ぐつち。

「ああ、それは間違いない」

「うん、そうだね」

自覚はあつたんだな……。少しだけ安心したぞ。

「姉ちゃん、変わった趣味してるんだね。姉ちゃんは面食いだと思つてたからちょっと意外だよ」

「うん、自分でも何故ぐつちを選んだのかはわからない。顔だつて

「イマイチだし、名前以外はほとんど何も知らない相手だからな」
私にも理由はわからない。ただ……。

鷹文は真剣な目で私を見つめる。そして眉を下げ悲しそうな顔をした。

「……僕が彼氏作れって言つたからなの？ 姉ちゃん自身は……。
それなら無理に……」

確かに鷹文が原因だ……。でも、それだけじゃない。だから、そんな顔はしないでくれ。

「……確かにそれもある。でも、それだけじゃない」「どんな理由があるの？」

私はぐつちの方を向く。

「……少し席を外してくれないか。お前には聞いて欲しくないんだ。
時が来たら説明するから、今は……」

説明するには昔の話をしなければなくなる。この話はまだぐつちには聞いて欲しくないんだ。……少しでも長く女の子として扱って欲しい。私の過去を知つてしまえばそれは叶わなくなるから……。「わかつたよ。外に出てるから話が終わつたら呼んでくれ」「ああ」

ぐつちは外に出る。

……昔の私は荒れていた。だから昔を知る人間で私のことを女子として扱う人間は居なくなつてしまつた。勿論これは事項自得なんだが。

「女の子として扱つてくれるんだ。あと、面と向かつて告白されたのは初めてだつた」

ラブレターなら何度か貰つたことはあるがな。

「……それだけ？」

鷹文は呆れた顔をする。

「……私にとつては大切なことなんだ。それにぐつちは私だけを愛してくれそだだから……」

の人達と同じ過ちだけは絶対にしたくなかった。

「……姉ちゃんはそれで幸せになれるの？」

鷹文は今まで見たこと無いなくらい真剣な目をした。

「……それはわからない。未来なんて誰にもわからないからな。でも、二人ならどんな苦難も乗り越えられる気がするんだ。」

証拠や理由なんてないがそんな気がする。

「そつか……姉ちゃんが良いなら僕は良いと思つよ」

「どういふか……鷹文が付き合えつて言つたんじやないか

「そうだつたね」

子供のような笑みを見せる鷹文。私も釣られて笑つてしまつ。それからぐつちについて鷹文に話した。

「あ、待たせつぱなしじゃん。うわ……あれから一時間以上経つてるよ」

鷹文が時計を見ながら言つた。少し話が弾みすぎたようだ。

私は急いでぐつちを呼びに行く。

「終わつたぞ。もう入つて大丈夫だ」

良かつた、怒つてないみたいだ。

「そう言えば自己紹介がまだだつたよね。僕は姉ちゃんの弟で鷹文つていうんだ。よろしくね、ぐつち兄ちゃん」

自己紹介をする鷹文。

「俺は……」

「良いよ、姉ちゃんに聞いたから」

「面会時間終了ですよ」

看護士が面会時間の終了を知らせる。

私達は病院を出る。

「……」

「気まずい雰囲気。

「……理由を聞かないのか？」

沈黙に耐えきれず、ぐつちに質問する。

「言いたくなさそだから……無理に聞くつもりはない」

ぐつちは優しいな。でも、甘える訳にはいかない。

「そうか……。でも、これだけは言わせててくれ。確かに鷹文に言わ
れたからお前の告白を受けた。お前に対して恋愛感情は全くない」

「……」

ぐつちは今にも泣きだしてしまった。罪悪感で胸が苦しくて
吐いてしまいそうだ。

「……すまないことしたと思つ。謝つて許される」とじやないの
もわかつていてる」

身勝手だけど許して欲しい。

「……いや、偽りの関係でも恋人になれて嬉しかったよ。だから、
気にしなくて良いから……」

「こんな酷いことをした私を許してくれることじやないの
器が大きいんだろう。もし、逆の立場なら……我なら絶対に許さな
い。」

「……許してくれるのか？ こんな酷いことをしたのに……。優し
いんだな。なら、私もお前のこと好きになるよう努力する」
私は嬉しくて握り拳をつくり小さくガツツポーズをした。

「俺達、別れるんじやないの？」

「どうしてそうなるんだ？」

「……ぐつちは私と別れたいのか？」

「別れたくない！」

「そうか……良かつた」

ぐつちのことを好きになるより頑張るぞ。……でも、どうすれば
良いのだろつ。

恥ずかしいが今まで恋愛経験ないんだ。だから、何をすれば良い
かわからぬ。

過去のせいで相談出来る友達も居ないし……。母にこんなことは
相談出来ない。

どうしよう……。

駄目元で

智代と彼氏彼女の関係（仮）になつてから何の進展もなく一週間経過した。一緒に下校はしているけど……。まだ手すら握ったことがない。

普通なら一週間も経過したなら何かしらの進展があるだろう。まあ、智代は俺のこと好きじゃないから仕方ないけど……。慰めの言葉なのに悲しくなるが……。

このままでは自然消滅してしまう。そんのは嫌だ！ 折角、偽りでも智代の彼氏になれたのだから……。

勿論、現状で満足するつもりはない。親好を深めて正式な智代の彼氏になりたいと思つ。

そのためには智代に好かれる男にならなければならない。でも、経験がないから何をすれば良いかわからなかつた。

……とりあえず駄目元で王道のデートにでも誘つてみよつかな。ギャルゲーだとそこから进展するのしな。

よし、明日デートに誘つてみよう。俺は意を決して智代をデートに誘つてみようと決めた。

翌日の放課後。俺は何時ものように校門で智代を待つている。どうやら智代のクラスの担任は長話が好きなようだ。一週間の中で智代のクラスが俺のクラスより早く終わつたことはない。単に俺の担任が手短に終わらせてる可能性もあるがな。

「お待たせ。何時も待たせてすまないな……」

智代がやつて來た。少し息を切らせてくる。走ってきたのだろうか？

「いや、智代のせいじゃないし」

悪くないのに謝る、智代。真面目だなと思う。いや、真面目すぎると気も……。

「そうだが……でも、ぐつちを待たせてしまったことには代わりないだろう」

「智代のためなら喜んで何年でも待つよ」

「Mじゃないですよ？ どちらかと言えばSですから、多分。

「ぐつちは優しいな……」

智代が小声で何か喋っている。でも、声が小さすぎて聞こえない。

「今何て？」

「へ？ な、何でもないぞ。何でも……」

何故かりんごのように頬を赤く染め慌てる、智代。そしてまた小声で喋る。くちやくちや氣になる……。

「大丈夫か？」

「何がだ？」

質問の意味がわからないといった感じの智代。

「顔赤いよ？ 熱もあるの？」

俺は心配になり智代の額に手を当て、自分の額に手を当て比べてみる。が、良くわからない。

俺は自分の額と智代の額をくつつける。

「……熱はないみたいだな」

良かつた。

「つ……」

何故か殴られた。顔だけでなく耳まで真っ赤な、智代。……痛いよ。

「いきなり何？」

「そ、それはこっちの台詞だ！ いきなり何をするんだ、お前は！ てつきり私は……」

凄い剣幕で怒鳴る、智代。

「私は、何？」

「つ……」

また殴られた。今度はその衝撃で木に叩きつけられた。……人つて飛べる生き物だったんだね……知らなかつたよ。

「……ぐつちはデリカシーに欠ける。少しは女心を理解して欲しい」「女心理解とか無理。

「秋の空って言うし……」

「暫く地上の者でなくしてやるつか?」

智代は微笑む。その笑みに何故か寒気を感じる。まるで北極に瞬間移動したみたいだ。

「ごめんなさい。努力します」

俺は土下座した。まだ死にたくないし……。

「全く……お前というヤツは……」

小さく溜め息を吐く、智代。

ヤバイ、説教モードだ。説教なんか喰らいたくない。

「そう言えば俺達付き合つてそろそろ一週間経つよな?」

だから話をそらすことにした。上手く行けばデートにも誘えるし。

「そうだな」

「だから、そろそろ恋人らしいことを……」

「一緒に下校してるじゃないか。これは恋人らしいだろ?うん、実際に恋人らしいぞ」

勝手に自己完結する、智代。

全然違つ! 恋人同士なら手を繋ぐとか、腕を組むとか、帰り際に……。

「……ぐつち?」

自分がだけの世界にトリップした俺を心配そうな目で見つめる、智代。

「はつ……とにかく、そろそろトーントしてくれても良いと思つ」妄想世界から帰還した俺は意を決して駄目元でデートに誘つ。

「別に構わないぞ。……どこに行くんだ?」

えええ!? まさかの〇〇が出来たよ。……駄目元だからプラン決めてないんだけど。

落ち着け、クールになれぐつち。今俺はクールなぐつち。略して

クールぐつち。

「……いや、勿論プランは立てたよ。ただ、智代が行きたい場所と違つたらアレだからさ……」

よし、完璧。流石、クールぐつち。さりげなく予定を立て忘れた事もカバーしている。

「予定が決まつてゐるならそれで大丈夫だ。ぐつちに会わせるぞ」

ガーン。完璧な作戦だったのに……。

「……好き嫌いとかあるでしょ？」

「ない」

即答されました。ピーマンとか食べれるの？ アレは全人類の敵だよー？

「……ごめん。断られると思ってたから予定立ててないんだ」

大きな溜め息を吐く、智代。

「ぐつち……お前馬鹿だろ？？」

真顔で断言された。事実なだけに否定出来ない。

「ああ、馬鹿だよ。で、智代は何処に行きたいの？」

「やうだな……」

ああ、俺は何て馬鹿なのだろう。こんな事になるならちゃんとプランを立てとけば良かった。智代があんな場所を選ぶなんて……。だが、違う場所にすることは出来ない。自分の失敗で智代を頼つたのだから、それを無下にするなどというのは流石に人の道に反する。

だから俺はその痛みを受け入れなければならないのだ。智代とのデートは楽しみ、でも……に行くのは憂鬱だ。はあ～。

視点変更

ぐつちと彼氏彼女の関係（仮）になつてから何の進展もなく一週間経過した。一緒に下校はしているけど……。まだ手すり握ったことがない。

普通なら一週間も経過したなら何かしらの進展があるだろ？
でも、ぐつちが鈍感過ぎて……。

「のままでは自然消滅してしまつ。そんなのは嫌だ！ ぐつちなら私の全てを受け入れてくれる気がするんだ……。私の暗い過去でさえも……。

私は鷹文の見舞いに来ていた。

「姉ちゃん、僕なんかに構つてないで兄ちやんとデートでもしてきたら？」

突然、脈らくもなく変なことを言ひ鷹文。まだ付き合つて一週間も経つてないのにデートなんて早すぎる。軽い女だと思われてしまふじやないか……。

「う、うるさいー！ 鷹文には関係ないだり！」私達のことはほっといてくれ

「いや、僕なんかに構つて姉ちゃんが振られたら申し訳ないしね」振られる……。ぐつちに限つてそんなことは……。

「大丈夫だ」

「どうして？」

「ぐつちは私にベタ惚れだからな。だから何の心配もない」
本当は少し不安だ。

「わからないよ。兄ちやんも男だからね……。誘惑されたら簡単に

「……」

浮氣してゐるぐつちを想像してしまひ。

「…………うう」

悲しくて悔しくて泣いてしまひそうだ。でも、弟の前で涙を見せ
る訳には行かない。

「わっ、ちょっ……姉ちゃん。泣かなくても……」

「だつて……」

姉失格だな。でも、悲しいんだから仕方ないじゃないか。

「冗談だつて……兄ちやんは浮氣しないよ、多分」

「……本当か？」

「うん。だから……とりあえずこれで涙を拭きなよ」
鷹文がハンカチを私に渡した。

「…………うん」

私はハンカチで自分の顔を拭う。弟の前で本当に泣いてしまうとは……恥ずかしい。……全部、ぐつちが悪いんだ。どうしてアイツは私をこんなに不安にさせるんだろう。別に好きではなかつた筈なのに……。

翌日の放課後。私は何時ものように校門に向かう。ぐつちと一緒に下校する約束をしてるからだ。

しかし、私の担任は長話が好きなようだ。一週間の中で私のクラスがぐつちのクラスより早く終わつたことはない。単にぐつちの担任が手短に終わらせる可能性もあるがな。

「お待たせ。何時も待たせてすまないな……」

「いや、智代のせいじゃないし」

悪くないのに謝る、智代。真面目だなと思つ。いや、真面目すぎる気も……。

「そうだが……でも、ぐつちを待たせてしまつたことは代わりないだろ?」「うう」

「智代のためなら喜んで何年でも待つよ」

ぐつちの優しさが心地いい。だからつい甘えてしまつ。

「ぐつちは優しいな……」

そんなんぐつちだから私は……。

「今何て?」

つい心の声を口に出してしまつっていたようだ。

「へ? な、何でもないぞ。何でも……」

頬が熱い。

「大丈夫か?」

「何がだ?」

「顔赤いよ？ 熱でもあるの？」

ぐつちが私の額に手を当てる。そして急接近するふたりの距離。
これは……キス、キスをされてしまうのか…？ まだ心の準備出来ないのに。でも、ぐつちになら私の初めてを……。

そしてふたりの……額がくつついた。どうやら私の勘違いだったようだ。私は一気に脱力してその場に座りこんでしまう。

「……熱はないみたいだな」

触れられた額が熱い。頬も焼けるように熱い。だから私は……。

「つ……」

照れ隠しにぐつちを殴る。

「いきなり何？」

「そ、それはこいつの台詞だ！ いきなり何をするんだ、お前は！ てつきり私は……」

数分前のドキドキを返せ！

「私は、何？」

「つ……」

もう一度照れ隠しに殴る。今度は上手く力を抑えられなかつた。でも、ぐつちの自業自得だ。だから私は悪くない。

「……ぐつちはデリカシーに欠ける。少しば女心を理解して欲しい」切実に。

「秋の空つて言うし……」

私の中で何かが切れた音がした。

「暫く地上の者でなくしてやるつが？」

「ごめんなさい。努力します」

ぐつちは土下座した。そこまでしなくても良いのこ……。

「全く……お前といつヤツは……」

小さく溜め息を吐く。

「そう言えば俺達付き合つてそろそろ一週間経つよな？」

「そうだな」

「だから、そろそろ恋人らしこ」とを……」

「一緒に下校してゐるじゃないか。これは恋人らしいだらう。うん、実際に恋人らしいぞ」

突然、不気味な笑みを見せるぐつち。何か悪い物でも食べたのだろうか？……心配だ。

「……ぐつち？」

「はつ……とにかく、そろそろデートしてくれても良いと思つ」

「別に構わないぞ。……どこに行くんだ？」

「楽しみだ。……でも、どんな服を着てけば良いのだろうか？」

「……いや、勿論プランは立てたよ。ただ、智代が行きたい場所と違つたらアレだからさ……」

「予定が決まつてゐるならそれで大丈夫だ。ぐつちに合わせるぞ」

「好き嫌いとかあるでしょ？」

「ない」

「……ごめん。断られると思つてたから予定立てないんだ」

思わず大きな溜め息を吐く。……やはり病院を紹介した方が良いのだろうか？

「ぐつち……お前馬鹿だらう？」

間違いない。

「ああ、馬鹿だよ。で、智代は何処に行きたいの？」

「そうだな……」

今週の日曜日にぐつちとデートの約束をした。……には幼い時に行つただけだから楽しみだ。

まだ、家族が壊れてない時に行つた。……少しだけ昔を思い出し鬱な気分になる。

大丈夫、ぐつちなら信じられる。ぐつちとなら彼等とは真逆の暖かい……。そして私は過去の呪縛に勝てるんだ。

私はそう自分に言い聞かせる……。

初デート

人間なら誰しも好き嫌いがあると思う。少なくとも俺には嫌いな物が沢山ある。

普通の人より多分多いと思う。これは良くないことだ。でも、嫌いなんだから仕方ない。好き嫌いをなくすつもりはないからな。その内の1つに動物がある。動物は命あるから物扱いはおかしい？だが、法律上動物は物扱いなのだ。だから苦情は法律を作った奴に言えよな。

そもそも人間は自分勝手過ぎる。先住民である動物を虐げ命を奪い土地すらも奪つた。それは正に悪魔の所業。

道徳に年上を敬うとあるが……それは出来ているのか？ 人間など動物達に比べたら赤子みたいなものだ。動物は人間と違う分類に考えているんですね、わかります。

人間は皆等しく悪魔である。だから俺も動物なんてどうでも良い。だって悪魔だもの。

俺は醜いモノを嫌う。動物は人間の醜いモノを特に具現化される気がする。

だから動物は嫌いだ。
なのに……。

今日、俺は嫌いな筈の動物園に行く予定だ。智代と動物園でデートをする約束をしたから。

待ち合わせの場所に着くと。

「おはよっ、ぐっち」

智代は水色の可愛いワンピースの服を来ていた。今日のためにおめかしをしてきたのだろう。

俺なんかとのデートのために……。ちょっと嬉しい、否かなり嬉しい。

対して俺は普段着だ。失敗したかも……。……デートの経験ないのだもの仕方ないよな。

因みに俺は遅刻はしないからな。約束の時間の10分前だ。

「おはよう

智代は何故か不安そうな表情をする。

「……その、おかしくないだろつか?」

「何が?」

「……服のことだ。私にはこういう可愛い系の服は似合わない気がする。でも、鷹文が着て行けと言うから……」

弟Gっ! ありがとう。今度見舞いに行くときは何か良い物を渡してやれつ。

「そんな事ないぜ。スゲー似合つてる。可愛いよ」

「……可愛い。そつかなら良かった。ぐつちに喜んで貰え嬉しいぞ」
智代は頬をりんごの様に赤く染める。

智代の『テレハ反則』だと思う。だから、つい……。

「そんなにジーと見ないでくれ。恥ずかしいじゃないか……」
穴があきそうな程に智代を凝視してしまう。

「智代が可愛いから仕方ない」

俺は悪くない! 智代の隣に居て凝視しない男など居るのだろうか? いやない! 反語おおおお!!

「止めてくれ……照れてしまうじゃないか」

更に頬を赤く染める智代。可愛い、可愛い過ぎる。
抱き締めたい。でも、悲しいけどそれは出来ない。何故ならば俺達は偽りの恋人同士だから……。

何時かは必ず! 欲しがりません、勝までは……。

そういうじてる内に動物園に到着してしまつ。憂鬱な気分になる。

「ぐつち、体調悪いのか?」

心配そうな顔で智代が質問する。

「大丈夫。ちょっと寝不足なだけだから

寝不足なのは本当だ。昨日の夕方から口が変わるものでドラクエのレベルあげしてた。ドラクエの中毒性は異常だな。

「そりか……なら良いんだ。無理はするなよ。あと睡眠は大切だぞ」
……睡眠は大切だよな。そんなことはわかっている。でも、夜更かしせずには居られない。恐るべし、ドラクエ！

俺達は動物園に入る。色々な動物がいる。動物園だから当たり前か……。

「ぐつち、シマウマだぞ！」

何故かテンションが異様に高い智代。まるで子供みたいだ。

「そうだね」

やる気なく適当に相槌をする。

「テンション低すぎむべ、ぐつち。……私と一緒に居るのが嫌なのか？」

智代は肩を力なく落とし、眉を下げる落ち込む。

し�ょげてる智代も可愛い。全ての智代が可愛い。抱き締めたいよ。

「そんな事あるばずがないだろつ。俺は智代が大好きなんだから」「本當か……？」

智代は目を細めて、俺の顔を凝視する。

顔が近すぎるよ。智代の形の良い唇が俺の視界にはつきりと映る。智代の吐息が俺の鼻をくすぐる。

俺は辛抱出来ず……智代を抱き締めしまう。頭では駄目だと理解しているけど体の暴走を止められなかつた。

何か柔らかいモノが俺の胸で潰せせる。これは！？

「なつ！？」

驚いた智代は俺の下半身を蹴る。男にしかわからない激痛が全身を襲う。俺は情けなく地面にしゃがみこむ。

「いきなり何をするんだ！？ びっくりするじゃないかっ！」

智代の頬は真っ赤に染まり、耳まで赤い。

「ゴメン。その智代が可愛いすきで我慢出来なかつた」

我慢とか無理。自重、何ソレ美味しいの？

「……せめて事前にそう言つてくれ。じゃないと心の準備が……」

「つまり事前に言えば問題ない？」

「智代を抱き締めて良いかな？」

「……少しだけなら構わないぞ」

智代は小さく頷いた。

俺は智代を抱き締める。柔らかい……女の子って柔らかいんだな。
産まれて初めて感じる感触に思わず涙腺が緩みすぎて油断したら感
涙してしまうそうだ。

幸せです。今の俺は間違いなく世界一の幸せを感じている。何
時までも抱き締めていたい。動物嫌いとかもうどうでも良い。憂鬱
な気分が吹き飛んだ。

「……そろそろ止めてくれ。恥ずかしくて倒れてしまいそうだ」
ずつと抱き締めていたい！

「延長お願いします」

「駄目だ」

智代は俺の肩を押して引きはがす。所詮、女の力だから男に敵う
筈が……。

「え！？」

俺は智代の力に全く逆らえず引き剥がされてしまう。アノ細腕の
何処にこんな力が！？

それとも俺が単に弱いのだろうか……。普通だと思つてたのに……
雑魚だったなんてショックだ。

そのショックのあまり呆然として、その場に石像のよつに固まっ
てしまつ。

「ほら、次行くぞ」

智代が俺の手を引っ張る。俺はその力に逆らつことが出来ずなす
がままだ。

俺を殴り飛ばしたことといい、先程の馬鹿力。……もしかして智
代は……。

突然、俺の手がもの凄い力で握り潰される。まるで万力で潰され

てるみたいだ。

「今ものすごく失礼な考え方をしただらう?」

智代の背後に黒いオーラが見える。怖い、怖すぎる。

「『めんなさい』

俺は土下座した。智代は大きく溜め息を吐く。

「次はないからな!」

智代と一緒に動物を見て回る。

「おい、ぐつち。彼処にお前のそつくりつの動物が居るぞ!」

智代は笑いながら猿山に居る一匹の猿を指差す。

「……」

幾等、俺が不細工といえどこれは酷い。でも、確かに似てるかも。俺は悔しくて智代を無視する。

「怒ったのか? 怒つってる顔は更に猿そつくりだな。うん、そつくりだ。寧ろ猿そのものだな」

「……」

イジメっ子?

「……でも、私はそんなお前が……」

智代は頬を赤く染めて小さく呟いた。何て言つたのだらう? すぐ

ぐく気になる。

「え、今なんて?」

「……え、聞いてたのか!? ……べ、別になんでもないぞ!」

智代は悪戯が母親に見付かった子供のように慌ててくる。

「気になる

「気にするな。それよりお腹が空かないか? もうお腹だし!」飯にしよう!

時計を見ると確かにもうお昼だ。お腹も空いているしランチにしよう。でもその前に……。

「さつき何て言つたか教えてくれよ

「しつこいぞ!」

殴られた。ちょっと調子に乗りすぎたか……。

その後はふたりでランチを食べる。そしてふたりで動物を見て回る。

嫌いな筈の動物を見ても全く嫌な気分にならない。寧ろ……。

智代と居るとどんな些細なことでも寶石のように輝いて見える。智代が出会ったことであんなに灰色だった景色が一変した。何時までもずっとこうして居たい。

だが現実は残酷で全ての時間には等しく終りがある。

日が落ち。辺りが闇に染まる。

「もう、こんな時間か……。そろそろ帰らないとだな。ぐっちはじと居ると楽しくてつい時間を忘れてしまう」

天が容赦なく楽しい時間の終りを告げる。

「俺もだよ。まだ一緒に居たいよ」

智代とふたりで永遠の時を生きたい。他には何も要らない。

「またデートしよう

終りは始まりでもあるのか……。

「ああ

俺達は動物園を出て、家路を急ぐ。

智代の家に着いた。

不意に俺の唇に何か柔らかいモノが触れた。これって、まさか……。

「……また明日」

そう言って智代は家に入つていった。

なんか唇を中心に全身が熱い。今なら何でも出来そうだ。

俺は頬をつねる。痛みを感じたから夢じゃない。

これって正式な恋人同士になれたってことだよな？ 智代は好きでもない相手にキスなんてしないだろうし……。

俺は嬉しさのあまり吠えたくなつたが我慢した。流石に夜に吠えたら近所迷惑だからな。

俺はスキップしながら家路に向かう。周囲には変人に見えたかも

知らないが気にしない。嬉しいんだから仕方ない。

この日、俺が唇を洗わなかつたのは言つまでもない。

世界は美しい、人生はかくもすばらしい。未来は輝いている。智代さえ居ればそう確信していられる。

視点変更

ぐつちと日曜日に動物園に行く約束をした。いわゆるデートというヤツだ。

動物園に行くのはかなり久しぶりだ。それはまだ両親の仲が良かつた遠い、遠い昔。

いや、昔の話をするのをよそつ。大切なのは過ちを認め反省することだから。彼らは十分すぎるほどに反省している。だから昔の話はもうしない。

ただ、暖かい家庭を取り戻すことを願い努力するだけだ。そして同じ過ちを一度と繰り返さない。きっとぐつちとなら暖かい家庭を……。って、まだ当分先の話だがな。

とにかく、ぐつちとの「トーク」が楽しみだ。そして私の気持ちを……。

私は鷹文の見舞いをするため病院に行く。怪我の治りは順調で来年の春には完治するみたいだ。

「そう言えば姉ちゃん日曜のデートはどんな服を着ていくつもりなの？」

まだ、鷹文にデートのことを話してない筈なのだが……。

「どうして知ってるんだ？」

「兄ちゃんがメールで言つてきたんだよ。で、どうするの？」「正直な話、経験がないからわからなかつた。

「普段着では駄目なのか？」

鷹文は大きく溜め息を吐いた。

「駄目に決まってるよ。そんなことしたら嫌われるよ」「嫌われるのは嫌だ。それだけは何としても避けなければ。

「どうすれば良いんだ?」

「前に父さんに買つてもらつたワンピースを着ていきなよ

アレは……。

「可愛い感じのは私に似合わないと思ひ」

残念だが。

「そんなことないって! 姉ちゃんなら絶対似合つよ

断言する弟。

「本当か……?」

とても信用出来ない。

「あいつとワンピースを着た姉ちゃんを見たら兄ちゃん喜ぶよ」

……ぐっちは喜んでくれるなら。恥ずかしいが頑張つてみよ。

約束の時間までまだ30分もある。少し早く来すぎたか……。だが、少しでも早くぐっちに会いたいのだから仕方ない。

それに待つ時間は嫌いじゃない。……恋人を待つ少女。女の子らしいだらう? うん、すぐ女の子らしい。

走つてるぐっちは私の視界に映る。まだ約束の時間まで10分以上も余裕があるのに……。ぐっちは私と同じ気持ちなのだろうか?

「おはよう、ぐっち」

「おはよー」

ぐっちは私の服を凝視する。やっぱり変なのだろうか……。不安だ。

「……その、おかしくないだらうか?」

「何が?」

「……服のことだ。私にはこういう可愛い系の服は似合わない気がする。でも、鷹文が着て行けと言うから……」

「この服は鷹文の彼女の河南子みたいに可愛い子じゃないと似合わないと思う。」

そう言えば河南子の姿を最近見ないな。喧嘩でもしたのだろうか？

「そんな事ないぜ。スゲー似合つてる。可愛いよ」

か、可愛い？ 私なんかがか！？ ワンピース着て来て良かつた。

ありがと、鷹文。

「……可愛い。そつかなら良かつた。ぐつちに喜んで貰え嬉しいぞ」「ぐつちは更に私を凝視する。

「そんなにジーと見ないでくれ。恥ずかしいじゃないか……」「体が熱い。可愛いなんて久しく褒められたことないからどんな反応をすれば良いかわからない。

「智代が可愛いから仕方ない」

「止めてくれ……照れてしまつじやないか」

ぐつちは奇声を発して、息を荒くする。こんなぐつちは初めてだ。ちょっと怖い。

そういひしてゐ内に動物園に到着する。

「ぐつち、体調悪いのか？」

青い顔をしている。足も酔つ払いのようになびきついている。

「大丈夫。ちょっと寝不足なだけだから」

私も興奮して寝れなかつた。そつか……ぐつちも私と同じなんだな。嬉しい。

「そつか……なら良いんだ。無理はするなよ。あと睡眠は大切だぞ」私達は動物園に入る。色々な動物がいる。動物園だから当たり前か……。

「ぐつち、シマウマだぞ！」

「そうだね」

やる気なく適当に相槌をする。

「テンション低すぎるとか、ぐつち。……私と一緒に居るのが嫌なのか？」

私のこと嫌いになつてしまつたのだろうか？ 不安だ……。

「そんな事あるばずがないだろ？ 僕は智代が大好きなんだから」

「本当か……？」

突然、ぐつちが私を抱き締めた。

「なつー？」

私はぐつちの下半身を蹴る。ぐつちは情けなく地面にしゃがみこむ。

「いきなり何をするんだ！？ びっくりするじゃないかっ！」

「ゴメン。その智代が可愛いすきで我慢出来なかつた」

「……せめて事前にそう言つてくれ。じゃないと心の準備が……」

心臓がいくつあつても足らないぞ。

「智代を抱き締めて良いかな？」

……。

「……少しだけなら構わないぞ」

私は小さく頷いた。

ぐつちは私を抱き締める。

「……そろそろ止めてくれ。恥ずかしくて倒れてしまいそうだ」

顔から火が出るくらい恥ずかしい。

「延長お願ひします」

「駄目だ」

私はぐつちの肩を押して引きはがす。

「えー？」

ぐつちは私の力に全く逆らえず引き剥がされてしまう。ヘタレすぎる……。

ぐつちは呆然として、その場に石像のよつに固まってしまう。

「ほら、次行くぞ」

私はぐつちの手を引っ張る。

ぐつちが何か変なことを考えている気がする。

「今ものすごく失礼な考え方をしただろう？」

「ごめんなさい」

ぐつちは土下座した。私は大きく溜め息を吐く。

「次はないぞ」

ぐつちと一緒に動物を見て回る。

「おー、ぐつち。彼処にお前のそつくりの動物が居るぞ」
私は笑いながら猿山に居る一匹の猿を指差す。

「……」

ぐつちは不満そうに頬を膨らませる。

「怒ったのか？ 怒つってる顔は更に猿そつくりだな。うん、そつ
くつだ。寧ろ猿そのものだな」

「……」

ぐつちは無視する。酷い……。

「……でも、私はそんなお前が……」

「え、今なんて？」

しまった、声に出していたのか。

「……え、聞いてたのか！？ ……べ、別になんでもないぞ！」

「気になる」

しつこい。

「気にするな。それよりお腹が空かないか？ もうお昼だし」「飯に
しよう」

時計を見ると12時を過ぎていた。お腹も空いているしランチ
にしよう。

「さつき何て言ったか教えてくれよ」

「しつこいぞ！」

私はぐつちを殴る。暴力はよくないが、しつこいぐつちはもっと
悪い。

その後はふたりでランチを食べる。そしてふたりで動物を見て回
る。

ぐつちと並ぶとどんな些細なことでも注目のように輝いて見え
る。

昔の私からは今の姿は想像出来ないだらう。昔の私が今の私を見
る。

たらどう思つのだろ？

叶うならばずっと行つてに居たい。

でも現実は残酷で全ての時間には等しく終りがある。

日が落ち。辺りが闇に染まる。

「もう、こんな時間が……。そろそろ帰らないとだな。ぐつちと居ると樂しくてつい時間を忘れてしまう」

天が容赦なく楽しい時間の終りを告げる。

「俺もだよ。まだ一緒に居たいよ」

私だつてまだぐつちと一緒に居たい。でも、遅くなると親に心配をかけてしまう。それは避けたかった。

「またデートしよ？」

それに終りは新しい物語の始まりでもあるのだ。

「ああ」

私達は動物園を出て、家路を急ぐ。

私の家に着いた。

これで終わりだなんて寂しい。まだ私の気持ちも伝えてないしな。でも、声で伝えるのは少し恥ずかしい。だから私は……。

「……また明日」

好きの気持ちを込めてキスをした。それは一瞬の出来事。瞬きしたら見逃してしまつような短い時間。でも、私にとっては大切な思い出になるだろ？ ぐつちにとつても大切な記憶になつてくれたら嬉しい。

「え！？」

戸惑う、ぐつち。私は恥ずかしくて戸惑うぐつちを置いて背を向け家に帰る。

因みにファーストキスだ。ぐつちは経験あるのだろうか？ …… 明日聞いてみよう。

だが、もし経験ありなら私はきっとそのぐつちの初めてのキスを奪つた女子に嫉妬してしまう。そんな醜態は好きな人に見せたくない。……聞くのは止めておこう。今は私がぐつちの彼女なのだから。

ふたりの記念となる思い出をぐつぐつ一緒に沢山作りたい。そして、ずっとふたり一緒に……。

お節介な彼女とぐうたら彼氏

……アノ智代とついに正式な恋人同士になれた。嬉しくて自然と頬が緩む。

それにしても……柔らかかったな。マシュマロみたいな感触だつた。

そんな事をずっと考えていたら……朝の4時になってしまった。ゲームで常に夜更かしをしているがこんなに起きていたことはない。しかも、明日は学校だといつのに……。

まだゲームやってないけど、流石に寝るか……。

俺は風呂に入つて寝ることにした。

「ぐつち、朝だぞ！ 早く起きてくれ」

何故か智代の声がする。でも、それは有り得ない。何故ならば智代に俺の家を教えた記憶がないからだ。故に智代が家に居ることは残念ながら有り得ないのだ。

ああ、なんだ夢か……。折角、彼女が彼氏を起こすといつ夢のシチュエーションなの!。

智代はカーテンを開ける。陽射しが日に染みる。……何で夢なのに感覚があるんだ?

最近の夢は感覚まであるのか……。スゲー進歩だな。しかし、そうなると頬を摘み夢かどうか確認出来なくなつてしまつじゃないか。それは困る。

「ほら良い天気だぞ。だから、早く起きるんだ」
「どうせ夢なら……。

「キスしてくれたら……」

「なつー?」

智代は頬をりんごのように赤く染め、慌てる。その仕草はマジで可愛い。その可愛いいたるやそこら辺のアイドルが「ミミ」見えるく

らいだ。

「……キスしたら起きるのか？」

智代は少し間を置いてから俺に質問する。

「起きるよ」

キスして貰えるなら死んでも蘇るよ。
俺の唇に柔らかいモノが触れた。……夢にしてはやけにリアルだ

な。

「ほら、キスしてやつたんだから早く起きろー！」

智代は怒鳴る。これは恥ずかしさを隠すためだろう。デレ状態の智代の可愛さは犯罪クラスと言つても過言じやない。

「ワンスマニアプリーズ」

夢だし、調子に乗つてみることにした。

「調子に乗るな！」

智代は俺の顔を踏む。ヤバイちょっと気持ちいいかも……。はつ、何かいけない世界に行つてしまつ所だった。

そして布団を奪う。

……もしかして現実？

「どうやつて智代入つて来たの？」

「普通に玄関からだぞ。戸締まりはちゃんとするべきだ。不用心すぎるぞ。気を付ける」

あつ、戸締まり忘れてた。まあ、泥棒に入られても盗まれる物なんてないからどうでも良いけどな。

「や、そうじゃなくて……俺は智代に家の場所教えてないじゃん」

「ぐつちが前にハガキ持つていただろう。それを記憶していたんだ」「どんな記憶力だよ……恐ろしい子。決して智代には逆らつまい。いや、逆らえないけどね。……俺は間違いなく尻にしかれるな。

「……何しに来たんだ？」

「ぐつちは登校時間がギリギリだらつ。それは良くないことだ。だから彼女としてお前の生活を改善させることにしたんだ。……それに毎朝、彼氏を起こすといふのはすぐ彼女らしいだらつ」

時計を見るとまだ30分も余裕がある。えーと、これが毎日続く
と……。夜更かしが当たり前の状況でそれは拷問に等しいぞ。

「智代……」

俺は真剣な目で智代を見つめる。

「ん、何だ？」

「別れよう」

そんな拷問に耐える自信はない。数分の沈黙。

「…………うん、わかった。だから、早く『冗談』だと書いてくれ。早く『冗談』だと書いてくれないと本当に泣いてしまいそうだ。うう…………」

智代は今にも泣き出してしまうぞ。

…………マジ可愛い。俺が間違ってたよ。智代のためならどんな拷問にも耐えてみせる。

「うん、冗談」

智代は無言で俺の太股をつかむ。

「いたつ」

その痛さで泣いてしまいそうだ。

智代は大きく溜め息を吐く。

「ぐつちの冗談は全然笑えない。よしてくれ…………」

智代は目を細めて、俺を非難する。

「いや、智代があんまりにも可愛くてさ」「か、可愛い……。ばかあ

智代は頬を赤く染め口を尖らせてそっぽを向く。

「マジで可愛い」「マジで可愛い」

「止めてくれ……照れてしまふじゃないか」

やつぱり智代をからかうと面白い。や、可愛いのは本心だけど。

「テレてる智代の可愛いとは誰も勝てないな

「うう……ばか、ばか、ぐつちのばか」

我慢の限界に達した智代は耳まで赤く染める。そして俺の胸を軽く連打する。

1時間後。

「はつ、学校……」

楽しそうで時間を忘れていた一人。

「さぼりつけ」

「駄目だ」

即答された。……今から行つても間に合はないのに。

「早く学校に行くぞ」

「めんどい」

智代は俺の手を強引にひっぱり学校へと連行する。俺は抵抗するが全く逆らえない。

男が女にリードされるのはカッ「悪いって思つてたけど……」いつものも良いかも知れないな。

毎朝自慢の可愛い彼女が迎えに来て、楽しく会話しながら登校する。うん、幸せな風景だ。

ただ、当分はゲーム控えないとだが……。

智代には言えないと授業中、眠たのは言つまでもないだろう。だって眠いんだから仕方ない。

視点変更

ぐつちとついに正式な恋人同士になれた。嬉しくて自然と頬が緩む。

この関係を育て何時かは……。そのために私は努力を惜しむつもりはない。

彼女は彼氏を起こしに行くものだと、こないだ見た本に書いてあった。

私はぐつちが持っていたハガキに書いてあつた住所を頼りに移動する。

するとアパートに着いた。探索するぐつちと書いてある表札が

見付かる。

何度かインター ホンを鳴らすが返事がない。試しに戸を右に動かしてしてみると開いた。

戸締まりしないなんて不用心だな。泥棒が入つたらどうするんだ。彼女としてちゃんと注意しないといけないな。

気持ち良さそうに眠るぐつちを発見した。

「ぐつち、朝だぞ！ 早く起きてくれ」
が、反応がない。私はカーテンを開ける。陽射しが部屋を照らす。
これでも起きないのか……。

「ほら良い天氣だぞ。だから、早く起きるんだ」
快晴だ。

「キスしてくれたら……」

……別にするのは構わないがムードとか考えて欲しい。

「なつ！？」

「……キスしたら起きるのか？」

でも、初めてではないし……恋人だから構わないか。
「起きるよ」

約束だからな。私はぐつちの唇を奪つた。一回目のキス……おは
よつのキスというのも女の子らしくていいな。「うん、すいべく女の子
らしい。

「ほら、キスしてやつたんだから早く起きろー」
約束を破る奴は嫌いだ。

「ワンスマニアブリーズ」

なぜ、英語？ しかも、発音が間違つてゐる。

「調子に乗るな！」

私はぐつちの顔を踏む。そして布団を奪つ。

「どうやって智代入つて来たの？」

「普通に玄関からだぞ。戸締まりはちゃんとするべきだ。不用心す
ぎるぞ。気を付ける」

「や、そうじゃなくて……俺は智代に家の場所教えてないじゃん」「ぐつちが前にハガキ持つていただろ。それを記憶してたんだ」「……何しに来たんだ？」

普通に見てわかるだろ。それともまだ寝ているのか？

「ぐつちは登校時間がギリギリだろ。それは良くないことだ。だから彼女としてお前の生活を改善させることにしたんだ。……それに毎朝、彼氏を起こすというのはすごく彼女らしいだろ」

時計を見るとあと30分しか余裕がない。

「智代……」

ぐつちは真剣な目で私を見つめる。何故だろ。……頬が熱い。真面目なぐつちは新鮮だな。何時も不真面目だから……。

「ん、何だ？」

「別れよ。」

……。

「……うん、わかった。だから、早く冗談だと黙ってくれ。早く冗談だと黙ってくれないと本当に泣いてしまいそうだ。うう……」

これは冗談だ。別れるなんて有り得ない。ぐつちは私にベタ惚れだからな。……自分にいい聞かせる。

99%冗談だと思うが……1%の本気が有り得る。私は女の子らしくないからな。不安で胸が押し潰されそうだ。頼むから早く冗談だと黙ってくれ。

「うん、冗談」

私は無言でぐつちの太股をつねる。

「いたつ」

ぐつちは泣く。……私をイジメるからだ！

私は大きく溜め息を吐く。

「ぐつちの冗談は全然笑えない。よしてくれ……」

本当に笑えないんだ。恋人をイジメて楽しいのか！？

「いや、智代があんまりにも可愛くてさ」

お、お世辞なんかに騙されないからな。でも、嬉しい。

「か、可愛い……。ばかあ」

私は頬を赤く染め口を尖らせてそつまを向く。

「マジで可愛い」

「止めてくれ……照れてしまつじやないか」

そんなに誉めないでくれ。なれてないからどうして良いかわからいんだ。

「テレてる智代の可愛いとは誰も勝てないな」

「うう……ばか、ばか、ぐつちのばか」

もう、無理だ。我慢出来ない。私はぐつちの胸を軽く連打する。

1時間後。

「はつ、学校……」

楽しすぎて時間を忘れていた二人。

「さぼりうぜ」

ぐつちはふざけた発言をする。ズル休みなんて私の目が黒いウチは見逃さないからな。

「駄目だ」

……確かに今から行つても間に合わないがズル休みよりは遙かにマシだ。

「早く学校に行くぞ」

「めんどい」

私は俺ぐつち手を強引にひつぱり学校へと連行する。ぐつちは抵抗するが全く意味がない。……弱すぎる。

毎朝大好きな彼氏を迎えに行き、楽しく会話しながら登校する。うん、幸せな恋人達の風景だ。

だが思つてたよりもぐつちを起こすのは大変だな。何時もよりも朝早く起きないと駄目だし、それなりに疲れる。

今日は授業中に眠らないよう気を付けないといけないな。大変だが仲を発展させるのに必要なことだから妥協は許したくな。私の夢の実現のためにも頑張るぞ！

ピーマンは全人類の敵！

人間なら嫌いな食べ物ひとつやふたつあるだろ？

俺が最も嫌いな食べ物、それは……。

ピーマン……口に入れた瞬間に苦味が広がり、食感もぐにゃぐにゃして食べ辛い。それに色が変だと思つ。あと、名前も嫌い。

故にピーマンは全人類の敵である。誰だよ、ピーマンなんか開発したのは……。

だから、俺は外食する時はピーマン入つてないか必ず聞いている。それなのに……。

俺は智代とファミレス來ていた。俺達が制服なのは学校帰りだからだ。

因みにファミレスといつのはファミリーレストランの略称であり、ファミリーレスラーと云つ意味ではないから誤解しないでくれ。

俺は店側のミスを不快に思い、怒りに身を任せて呼び出しボタンを連打する。これは絶対に許されない行為である。生涯の許せないランキングトップ30には入る、多分。

「そんなんに連續で押すな。壊れたらどうするんだ？」

智代は俺を諭す。この程度で壊れる訳がない、多分。

イケメンな店員がやってきた。それが余計に俺を苛立たせる。イケメンとか……爆発すれば良いのに！

「どうされましたか、お客様？」

「どうもこうもねえーよー、俺はピーマン入つてないからこの料理を注文したんだ！ なのに……」

俺は怒鳴る。三流店への迷惑、何ソレ美味しいの？ レストランはサービス業なのに……客を不快にさせるとか何なの？

「それは大変失礼を致しました。急ぎ作り直して参ります」

彼は深々と頭を下げ謝罪する。そして問題の料理を下げる、踵を

返して厨房に向おうとする。

こちらの希望通りピーマン抜いた料理を持ってきて、この件は解決。イケメンはムカつくが。

それなのに……。

「待ってくれ……それには及ばない」

智代が彼を呼び止める。彼は振り向く。

「……よろしいのですか?」

「ああ、構わない」

「かしこまりました」

彼は料理をテーブルに置き直す。

「いや、全然良くないから!」

俺は再度怒鳴る。

「お客様……店内ではお静かにお願いします。他のお客様の迷惑になりますので」

そう言つて彼は去る。

「ハア? ミスしたのはテメエだろうが! 人が下手に出てやうある調子に乗りやがって!」

俺は全力で怒鳴ろうと息を吸い込む。

「……」

智代が「黙れ」と殺氣を込めた目で、無言で俺を睨む。

へタレな俺は恐怖で身がすくみ、声を出せなくなる。

「私の連れが迷惑をかけてすまなかつた」

智代は頭を下げ謝罪した。

智代が俺の方を向く。

「次、また私に恥をかかせたら帰るからな」

智代が帰る……つまり、それはデートの終了を意味する。それは嫌だ。折角のデートなんだから楽しみたい。

俺は悪くないけど、仕方ないか……。

「ゴメン。気を付けるよ。雰囲気壊してすみません」

智代に頭を下げる謝罪する。

「わかつてくれればそれで良い。……折角のデートなんだから私が
つて楽しみたいからな」

数分後。相変わらずピーマンが残ったままだ。ピーマンを食べよう
と何度も挑んだが全く失敗した。

体でなく魂が俺の体内にピーマンを摂取することを拒んでいる感
じだ。だいたい、ピーマンは先にも言ったが全人類の敵である。
故に食べないし、食べる意味がわからない。敵を食べるメリッ
トは何？ スピリット・オブ・ファイアみたいに食べたら力が上が
るならまだわかるが……。

「早く食べる。料理が冷めてしまつぞ」

智代が催促する。

「無理」

「どうしてなんだ？」

「ピーマンは全人類の敵！」

智代は肩を力なく落とし、眉を下げる。そして大きな溜め息を吐
いた。

「……意味がわからない」

意味がわからないことが、俺には理解出来ない。

「智代だって嫌いな食べ物あるだろ？」「…

「ない」

智代は一瞬間すら置くけとなく即答で断言した。

「……マジ？」「…

嫌いな食べ物がないとか信じられない。

「私は嘘が嫌いだ」

確かに智代は嘘が嫌いだ。だから、他人に対しても嘘を吐くこ
とはないだろう。つまり、食べるしかないのか……。

が、何度も挑んでもピーマンを食べることは出来ない。

智代は侮蔑した目で俺を見る。

「……さっきからお前は何をやつてるんだ？」

「見ればわかるだろ？」「

智代は小さく溜め息を吐いた。しかし、行動とは裏腹に智代の表情は暗くない。寧ろ、明るくみえる。

「ほら、私が食べさせてやるから口を開けろ」

智代がピーマンをフォークで刺し、俺の口元に持ってくる。「これは！？ 恋人にして貰いたいランキングトップ10に入る、恋人に食べさせて貰うという行為じゃないか！ なら『ピーマン』ときに出す理由などない。俺の口よ、開けっ！ が、思いと裏腹に口は開けなかつた。

「……私のこと嫌いなのか？」

智代はとても悲しそうな表情をする。

「や、好きだよ」

「なら、口を開けろ」

「開けたいんだけど……開けられないんだ。どうやら俺のピーマン嫌いは魂に刻み込まれていてるみたいだな。だから、諦めて帰ろ？」「智代は強引にピーマンを俺の口に入れようと隙間にねじ込む。しかし、ピーマンを扼む歯は堅く閉ざし開かない。

その堅さはまるで要塞のようだ。

「なら……その歯をへし折つて食べさせてやる」

「え、それは……」

智代は更に力を込める。歯茎がキシキシと音を立てている。マジで歯が折れてしまいそうだ。

「ちょ、待て待てマジで折れる。誰か助けて！」「…

俺は叫ぶ。

「問答無用だつ！」

あと少しで歯が折れるであろう、その刹那。

「お客様……お静かにお願いしますって私言いましたよね？ 他のお客様のご迷惑になるのでおかえりください」「俺達は強制的に追い出された。

もの凄く気まずい雰囲気。折角の「ティー」なのに……。ヘボ店員のせいで最悪な「ティー」になってしまった。今度あつたら覚えてろよ……。

しかし、それより今はこの雰囲気をなんとかしなくては…

「いやはや……俺のピーマン嫌いは本当にどうしようもないね」

「……」

智代は非難の目で、俺を見つめる。

「いや、治そうとは思ってるんだよ」

無論、嘘である。ピーマンを克服するつもつなど全くな。

「本当かあ……？」

智代は疑惑の目で俺を見つめる。

「……そうだ、智代が作ってくれた料理なら食べれるかも」

智代は完璧すぎると思つ。人間なら誰でも1つは苦手なものがある筈だ。俺の推測では料理だと思つ。

「う、それは……」

案の定、智代はううたえる。やはり、智代は料理が苦手なんだな。手料理食べられないのは残念だが……これでピーマンを食べる必要はなくなつたから吉としよう。

「わかった。明日作つてくる」

「そりそり、やつぱり料理は無理だよね。まあ、料理が出来なくても智代は可愛いから問題ないよ。だから、わざと氣を落とさず……つて、ええ!? ……料理出来るの?」

「俺の推測が外れるなんて……」

「ああ、女の子だからな。料理くらべて出来るが。明日は期待していろ」

「や、俺の推測は間違いない……理由はわからないけどそんな気がする。する。

「……無理しなくて良いから」

「無理なんかしてないぞ」

死亡フラグ確定? でも、智代の手料理が食べれるなら死んでも本望かも……。

視点変更

ぐつちと正式な恋人になつてから一週間が過ぎた。

しかし、私達は何の進展もないままただ無為に時間を浪費している。精々、子供みたいなキスをするくらいだ。

動物園でデートした時みたいに私を強く抱き締めて欲しい。キスも触れるだけでなく、もつと……。

言葉にすれば簡単だが、そんな恥ずかしいことは言えない。それに拒まれてしまったら私はまた壊れてしまうかも知れない。

だから、私は精一杯の気持ちを込めてアピールする。

なのに……ぐつちは全く気付いてくれない。……鈍感にもほどがあるぞ。

私はもつとぐつちと仲良くなりたいのに……どうすればこの想いをお前に伝えることが出来るのだろうか？

私達はファミレス來ていた。俺達が制服なのは学校帰りだからだ。ぐつちは馬鹿みたいにボタンを連打する。恥ずかしいからそんな子供みたいなことをしないで欲しい。

「そんなに連續で押すな。壊れたらどうするんだ？」

しかし、ぐつちは怒りで私の言葉が耳に入らないのかボタンを押すのを止めない。

仕方なく力ずくで止めさせようと思つてたら、店員がやつてきた。

「どうされましたか、お客様？」

「どうもこうもねえよー。俺はピーマン入つてないからこの料理を注文したんだ！ なのに……」

ぐつちは怒鳴る。店の迷惑になるから止めて欲しい。

「それは大変失礼を致しました。急ぎ作り直して参ります」

彼は深々と頭を下げ謝罪する。そして問題の料理を下げる、踵を

返して厨房に向おうとする。

「こちらの希望通りピーマン抜いた料理を持ってきて、この件は解決。

だが、それは果たして本当ぐづちのためなのか？ 好き嫌いは良くな。

「待つてくれ……それには及ばない」

私は彼を呼び止める。彼は振り向く。

「……よろしいのですか？」

「ああ、構わない」

「かしこまりました」

彼は料理をテーブルに置き直す。

「いや、全然良くないからー！」

ぐづちは再度怒鳴る。

「お客様……店内ではお静かにお願いします。他のお客様の迷惑になりますので」

やう言つて彼は去る。

「……」

ぐづちがまた怒鳴りつとっている。今度、騒いだら絶対に追い出されてしまう。折角のデートがこんな事で終わってしまうなんて嫌だ。

私は殺氣を込めた目で、無言でぐづちを睨む。

ぐづちは恐怖で身がすくみ、声を出せなくなる。

「私の連れが迷惑をかけてすまなかつた」

私は彼に頭を下げ謝罪した。

私はぐづちの方を向く。

「次、また私に恥をかかせたら帰るからな」

「ゴメン。気を付けるよ。雰囲気壊してすみません」

ぐづちが私に頭を下げ謝罪する。

「わかつてくれればそれで良い。……折角のデートなんだから私だけ楽しむたいからな」

数分後。相変わらずピーマンが皿の上に残つたままだ。ピーマン

を食べようと何度も挑んだようだが全て失敗した。

「早く食べる。料理が冷めてしまうぞ」

私はぐつちに催促する。

「無理」

「どうしてなんだ?」

「ピーマンは全人類の敵!」

私は肩を力なく落とし、眉を下げる。そして大きな溜め息を吐いた。

「……意味がわからない」

ピーマンは栄養価も高くて、美味しいじゃないか。

「智代だつて嫌いな食べ物あるだろう?」

「ない」

好き嫌いは良くない。アレルギーなら仕方ないが……。

「……マジ?」

ぐつちは目を大きく開き驚いている。

「私は嘘が嫌いだ」

嘘は人を不幸にする。そして私のトラウマを思い出させる。

「……さつきからお前は何をやつてるんだ?」

「見ればわかるだろう」

私は小さく溜め息を吐いた。どんだけピーマンが嫌いなをだ。

しかし、これはチャンスなんじゃないか?

ここでピーマンを私が食べさせてやれば好き嫌いもなくなり、私との仲も一步前進する気がする。

うん、これはチャンスだ。少し恥ずかしいが、ぐつちとの仲を进展させるために頑張るぞ!

「ほら、私が食べさせてやるから口を開ける」

私はピーマンをフォークで刺し、ぐつちの口元に持っていく。が、ぐつちの口は堅く閉ざされている。私の好意が拒まれた。つ

まつ……。

「……私のこと嫌いなのかな？」

早く否定してくれ。じゃないとの場で泣き崩れてしまつ。

「や、好きだよ」

……良かった。しかし、それならなぜ私の好意を拒むんだ？

「なら、口を開ける」

「開けたいんだけど……開けられないんだ。どうやら俺のピーマン嫌いは魂に刻み込まれてゐるみたいだな。だから、諦めて帰らう」私は強引にピーマンをぐつちの口に入れようと隙間にねじ込む。しかし、ピーマンを拒む歯は固く閉ざし開かない。

その堅さはまるで要塞のようだ。

「なら……その歯をへし折つて食べさせてやる」

「ひつなつたら意地だ！ そのためなら手段は選ばない。

「え、それは……」

私は更に力を込める。歯茎がキシキシと音を立てている。よし、後少しど歯が折れそうだ。

「ちょ、待て待てマジで折れる。誰か助けて！」

俺は叫ぶ。

「問答無用だつ！」

あと少しで歯が折れるであつ、その刹那。

「お客様……お静かにお願いしますつて私言いましたよね？ 他のお客様の迷惑になるのでおかえりください」

私達は強制的に追に出されてしまつ。

もの凄く氣まずい雰囲気。折角のデートなのに……私が暴走したせいでの最悪なデートになつてしまつた。それに店にも迷惑をかけてしまつた……。後で謝罪に行こつ。

しかし、それより今はこの雰囲気をなんとかしなくては！

「いやはや……俺のピーマン嫌いは本当にどうもないね

全くだ、好き嫌いはよくない。」

「……」

「いや、治そうとは思つてるんだよ」

そんな雰囲気は全く見れないのだが……。

「本当かあ……？」

「……そうだ、智代が作ってくれた料理なら食べれるかも」

料理……今まで作ったことがない。家庭科の実習も昔の私は協調性がないため避けていた。だから、全く経験がない。

「う、それは……」

しかし、ぐつちが望むなら叶えてあげたい。そして喜ぶ顔が見た
いんだ。

「わかった。明日作つてくれる」

「そうやつ、やっぱり料理は無理だよね。まあ、料理が出来なくて
ても智代は可愛いから問題ないよ。だから、やつ氣を落とさず、
つて、ええ！？ ……料理出来るの？」

ぐつちは酷く驚いた。……やはり、女の子じゃない私が料理を
したらおかしいのだろうか。いや、ぐつちは私のことを可愛い女の
子つて言つてくれた。

「ああ、女の子だからな。料理くじい出来るや。明日は期待してい
る」

「……無理しなくて良いかい

「無理なんかしないぞ」

愛する彼氏のために料理を作る。これはすこく彼女らしいんじゃ
ないか。うん、彼女らしい。

上手く行けば一步前進するかも知れない。だから、精一杯頑張る
ぞ！

ふたりの未来の為にも……。

初めての

家に着くと私は早速明日の弁当の準備にとりかかる。しかし、何からやれば良いのか全くわからない。

ピーマンを使った料理……ピーマンの肉詰め、ナポリタン、餡かけ焼飯など色々ある。

でも、作り方がわからない。

仕方ない適当に作るか……。母が作った料理を真似すれば何となるだろう、多分。

数分後。

「何故だああああ！――！」

私の絶叫が誰も居ない室内に木霊する。

私の試みは何故か全て失敗した。出来たのは良くわからない何か。料理というのは勿論、物体であるかも定かではない。しかも、危険な異臭を放っている。

「ただいま」

母が仕事から帰ってきたようだ。

私は玄関に行く。

「おかえり」

母は怪訝な顔をして、部屋の臭いを鼻を鳴らしかぐ。

「何か……変な臭いがするんだけど」

「ああ、ちょっと料理を作ろうと思って。……でも失敗したんだ。それで……。ちゃんと後で片付けるから心配は要らない」

すると、母は何故かいやらしい笑みを浮かべる。

「例の彼氏に手料理を作つてあげるのね？ やっぱり、智代も女の子ね。安心したわ、その子の影響かしら？」

どうせ、私は女の子らしくない！ しかも、母みたいな美人から見れば尚更だろう。娘の巣廻日無しで母は美人だと思う。綺麗に整つた顔と均整の取れた体。全身から溢れる上品なオーラ。全て敵わ

ない。

ぐつちと母親を会わせるのは何としても避けなくては……比べられない。

そうだ！ 母に料理を教わろう。

「うん。でも、料理をした事ないからやり方がわからなくて……。だから私に料理を教えて欲しい」

母は真剣な表情をする。

「私はスバルタよ。智代について来れるかしら？」

一日で料理を覚えるのだから大変なのは元より覚悟している。

「ああ、望むところだ！」

「……わかったわ。でも、もう夕飯の時間だから特訓はその後にしましよう」「うわかった

私達は帰ってきた父と一緒に母の作った夕飯を食べる。

それはとても美味しいくて……私の作ったそれとは次元が違つていた。私にこれをマスターすることは可能なのだろうか？

想像以上の壁を体感して弱気になる。でも、ぐつちを喜ばせるために頑張るぞ！ 弱気になる自分に活を入れる。

夕飯を食べ終え、特訓がスタートした。

「智代は何を作りたいの？」

「ピーマンを使った料理を明日の弁当に入れたいんだ」

「どうしてピーマンなの？」

「……私の友人にピーマン嫌いな人が居るんだ」

流石に面と向かって彼氏の話をするのは恥ずかしい。

「例の彼氏ね」

バレバレだった。どうしてバレバたんだああああ……私は焦りで高鳴る心臓を静めて、平常心を保つよう頑張る。

「……好き嫌いは良くないと思うんだ。その話をしたら『智代の手料理なら食べれる』と言ったからだ」

「もへ、名前で呼び合つ関係なのね。で、何処まで言つたの？」

「……」

私は無視する。

母は軽く溜め息を吐いた。

「仕方ないわね。この話はまた今度にしましょ。献立はピーマンを使ったサラダにするわ」

サラダ……野菜を切つて盛り付けるだけ。果たしてこれは料理なのだろうか？しかし、私には母しか頼る存在がない。故に従う以外の選択は用意されてないのだ。

「わかった」

「先ずは野菜を洗うところからよ」

私は洗剤をスポンジに付け、スポンジで野菜を擦る。洗剤を洗い流す。

「出来たぞ」

「……」

が、反応がない。母は呆然とする。

「野菜を洗剤で洗う奴があるかああああ！」

何故かスリッパで頭を叩かれた。私はただ言われた通りにやつただけなのに……。

「もしかして、洗剤でなく漂白剤を使うのが正解なのか？」

……数分の沈黙。まるで時間が凍りついたようだ。

「……私が代わりに作ろうか？」

「駄目だ」

その方が楽だと思う。でも、それはしたくない。ぐつちは私の手料理を楽しみにしてるのだから。

「なら、真面目にやりなさい」

「私は真剣だぞ！」

母は額に手を当て、倒れそうになる。私は母を掴み倒れるのを防いだ。

「大丈夫か？ 何か嫌なことでもあつたのか？」

「……何でもないわ。野菜は水洗いで大丈夫だからね」
なら最初からそう言えれば良いのに……無論、口には出さない。

「わかつた」

私は言われた通り野菜を水で洗う。

「次は包丁の使い方についてよ」

ムツ、私はもう高校生だぞ。それぐらいわかる。

「それはわかるから大丈夫だ、必要ない。早く次のステップに行つてくれ」

「……なら、試しにキュウリを切つてみなさい」

私はキュウリを切ろうと包丁を握る。

「ストップ！ やっぱり、出来てないじゃない。そんな握りしてたら切れる物も切れないわ。それに左手を猫の手にして支えるのも忘れてるし……」

私は母の言葉を無視してキュウリを切る。すると綺麗に切れた。
私の力と速さがあれば支えなど必要ないのだ。

「どうだ」

私は誇らしげに胸を張る。

「……」

母は私の頭を無言でオタマで叩いた。

「ちゃんと基本を覚えなさい。基本をおろそかにする人間は最低よ」
母は私に一時間くらい説教をする。貴重な時間が浪費されていく。
……師事する相手を間違えたかも知れない。
そして基本を徹底的に叩きこまれた。

「次は盛り付けよ」

そんなの誰でも出来るし飛ばして欲しい。が、無論口には出さない。これ以上の時間の浪費は避けたいからな。

「食べさせたい相手を思つて見栄え良く綺麗に盛り付けることが大切よ」

よし、ぐつちへの想いを込めて盛り付けるぞ。

「出来たぞ」

自分で言つのもなんだが中々の出来だと思つ。

「うーん……30点つて所かしら」

辛口すぎないか？

「今日はもう遅いし……これで終りにしましょ」

確かに時計を見ると時計の短針が12を指していた。

「だが、まだ料理が……。流石にサラダだけなんて寂しそぎるぞ」「智代のと一緒に作つてあげるわよ。私に任せときなさい」

他者に任せるのはあまり好きじゃない。それに約束を破るだなんて出来ないし、したくない。

「……それは出来ない」

「どうして？」

「約束したから」

「実際にサラダを作つたじゃない」

「確かにそうだ。でも……。」

「ぐつちには私以外の女性の手料理を食べて欲しくないんだ！！！」
私の力だけでぐつちを喜ばせたい」「

結局は何だかんだと言いながらもその一言に囚われる。

突然、母はとても下品な笑みを見せる。

「ふーん、ぐつち君つて言つんだ。今後、家に連れてきなさい。
会つてみたいから」

「はっ！？」 しまつた、つい……。

「それは……」

母は大きな溜め息を吐いた。

「明日も仕事なんだけど……娘の頼みだから仕方ないか。徹夜で作
るわよ」

「……。」

「すまない」

私の我が儘に巻き込んで申し訳ないと思つ。でも……。
母は優しく笑う。まるで天使のようだ。

「違うわよ。こういう時はありがとうよ」

「うん、ありがとう！」

何故だろ？ 悲しくないのに涙が……。

朝日が目にしみる。結局一度も成功出来なかつた。でも、何とか食べれるレベルまでのモノは出来た、味は保証出来ないが。最初の頃に比べたら格段の進歩だろ？

「どうするの？ それ持つていくの？ それとも私が作る？」

母がもの凄く眠そうな目で私に質問する。

その答えは最初から決まつている。

「……正直に話す

正直、落胆をせつてしまつのは心苦しい。全て嘘を吐いた私が悪いのだから……。

「そう、じゃあ私は寝るわね。おやすみなさい

母は寝室に向かう。

「ああ、ありがと。おやすみ」

私は努力した成果を弁当に詰めて学校に向かつ準備をする。今の母に弁当を頼むのは無理だ。父にはトーストを食べて貰おう。ぐつちは今日晩飯抜きになるかもしれないな。貰える筈の弁当がなくなるのだから。すまない……嫉妬深い彼女を持ったのが運の尽きと諦めてくれ。何時か必ず私が、だから……。

視点変更

仕事を終えた私は帰宅する。

「ただいま

娘の智代が笑顔で出迎えてくれる。

「おかえり」

キッチンの方から変な臭いがするわ。何かしら？

「何か……変な臭いがするんだけど」

「ああ、ちょっと料理を作りうつと思って。……でも失敗したんだ。

それで……。ちゃんと後で片付けるから心配は要らない」

智代が料理！？

最近智代がどんどん女の子らしくなって行つて
る。例の彼氏の影響かしら？ 初めは反対だったけど……これなら

清い関係なら認めても良いかも知れないわね。

「例の彼氏に手料理を作つてあげるのね？ やっぱり、智代も女の子ね。安心したわ、その子の影響かしら？」

智代は可愛いに勿体ないとずつと思っていた。母親の巣廻日無し
で智代は可愛いと思う。そこら辺のアイドルなんかより絶対に可愛い
わ！

「うん。でも、料理をしたこないからやり方がわからなくて……。だから私に料理を教えて欲しい」

私は夢でも見てるのかしら？ まさか智代と親子の会話が出来る
なんて……もしかして、この智代は偽者なの？ 私は目を細め本人
かどうか確認する。

「私はスバルタよ。智代について来れるかしら？」

「ああ、望むところだ！」

「……わかつたわ。でも、もう夕飯の時間だから特訓はその後にしましよう」

「わかった」

私達は帰ってきた夫と一緒に私の作った夕飯を食べる。

夕飯を食べ終え、特訓がスタートした。

「智代は何を作りたいの？」

「ピーマンを使った料理を明日の弁当に入れたいんだ

「どうしてピーマンなの？」

「……私の友人にピーマン嫌いな人が居るんだ」

流石に面と向かって彼氏の話をするのは恥ずかしい。

「例の彼氏ね」

智代にこんな風に想われるなんて……。もし、娘を泣かしたら産まれてきたことを後悔させてあげる。

「……好き嫌いは良くないと思うんだ。その話をしたら『智代の手料理なら食べれる』と言ったからだ」

「もう、名前で呼び合ひ関係なのね。で、何処まで言つたの？」
キス以上の関係は許しませんよ！

「……」

智代は無視する。

私は軽く溜め息を吐いた。

「仕方ないわね。」この話はまた今度にしまじょ。献立はピーマンを使ったサラダにするわ

「わかった」

「先ずは野菜を洗うところからよ」

智代は洗剤をスポンジに付け、スポンジで野菜を擦る。洗剤を洗い流す。

……意味がわからない。

「出来たぞ」

「……」

「野菜を洗剤で洗う奴があるかああああ！」

私はスリッパで智代の頭を叩いた。

「もしかして、洗剤でなく漂白剤を使うのが正解なのか？」

「ひ、漂白剤って……。ふざけてるの？」

「……私が代わりに作ろうが？」

漂白剤で野菜を洗う子に、料理を教える自信なんて私にはない。

「駄目だ」

「なら、真面目にやりなさい」

「私は真剣だぞ！」

私は額に手を当て、倒れそうになる。智代は私を掴み倒れるのを防いでくれた。

「大丈夫か？ 何か嫌なことでもあったのか？」

今ここであつたのよ！？漂白剤つて……馬鹿なの？やる気あるの？と、叱りたかつたがグッと堪えた。

「……何でもないわ。野菜は水洗いで大丈夫だからね」

智代が「なら、最初から言え」と非難したそうな顔で私を見る。

……殴つて良いかしら？

「わかつた」

智代は言われた通り野菜を水で洗う。

「次は包丁の使い方についてよ」

智代は馬鹿にするなと頬を膨らませる。

「それはわかるから大丈夫だ、必要ない。早く次のステップに行つてくれ

「……なら、試しにキュウリを切つてみなさい」

私はキュウリを智代に渡した。智代はキュウリを切ろうと、包丁を握る。

握り方が全然違う……。それ日本刀の握りよね？

「ストップ！ やっぱり、出来てないじゃない。そんな握りしてたら切れる物も切れないわ。それに左手を猫の手にして支えるのも忘れてるし……」

智代は私の言葉を無視してキュウリを切る。すると綺麗に切れた。智代の力と速さがあれば支えなど必要ないのかも知れない。だが私は母親なのだ。娘の間違いを正す義務がある。

「どうだ」

智代は誇らしげに胸を張る。

「……」

私は智代の頭を無言でオタマで叩いた。

「ちゃんと基本を覚えなさい。基本をおろそかにする人間は最低よ

私は智代に一時間くらい説教をする。

そして基本を徹底的に叩きこんだ。

「次は盛り付けよ」

また不満そうな顔をする、智代。確かに押し入れに鞭があつたよう

な……。

「食べさせたい相手を思つて見栄え良く綺麗に盛り付けることが大切よ」

智代は盛り付けを初める。

「出来たぞ」

斬新的ね。それ以外に評価しようがないわ。

「うーん……30点つて所かしら」

私もまだまだ甘いわね。本当ならマイナス30点なのに。

時計を見ると短針が12を指していた。……明日も仕事なのに。

「今日はもう遅いし……」これで終りにしましょう

正直、眠い。

「だが、まだ料理が……。流石にサラダだけなんて寂しそぎるだもん」

「智代のと一緒に作つてあげるわよ。私に任しどきなさい」

お願いだから私を眠らせて！

「……それは出来ない」

「どうして？」

「約束したから」

「実際にサラダを作つたじやない」

「ぐつちには私以外の女性の手料理を食べて欲しくないんだ！！！」

私の力だけでぐつちを喜ばせたい

結局は何だかんだと言いながらもその一言に反応するみたいだ。私はもうそういう時代があったわ……。好きな人のために頑張る、懐かしい。

「ふーん、ぐつち君つて言つんだー。今後、家に連れてきなさい。

会つてみたいから」智代をこれほど夢中にさせる相手が気になるわ。

「それは……」

私は大きな溜め息を吐いた。

「明日も仕事なんだけど……娘の頼みだから仕方ないか。徹夜で作るわよ」

「すまない」

智代は今にも泣き出しそうな顔をする。

「違うわよ。こいつ時もありがとうよ」

「うん、ありがとう！」

朝日が目にしみる。結局、徹夜になつた。しかも、その甲斐もなく未だに成功はない。そして兎に角眠い。

でも、何とか食べれるレベルまでのモノは出来た、味は……娘のプライドのためにもノーコメントでお願い。最初の頃に比べたら格段の進歩だろう。

「どうするの？ それ持つていいくの？ それとも私が作る？」

「……正直に話す」

嘘をばらすのはとても勇気が居る。とても勇氣ある決断だと思つわ。兎に角、私は眠い。

「そう、じゃあ私は寝るわね。おやすみなさい」

私は寝室に向かう。本当は朝食とお弁当作らないと駄目だけど……

そんな気力はないわ。

兎にも角にも眠いのよ！ お願いだから仕事に行く時間まで寝かせてください。それだけが私の願いです。

初めての（後書き）

スランプなので暫く休止します。

弁当？

昼休み。

俺は今までに人生の分かれ道に居る、一いつこうの何て言つんだっけ……ライフカード？

眼前には智代が作ったという料理（？）が見える。
疑問系なのはそれが俺の知る料理の定義に全く一致していないからなのだが……。

恐ろくなのが焼きすぎで墨に変化した卵焼きとワインナー、異臭がする未知の色をした液体などなど。

唯一まともなのはサラダだけという……。

この説明を聞けば疑問系の理由をして頂けると思つ。

無論、弁当は用意していない。

失敗する可能性を考慮しないのか？

常識的に考えて智代が失敗する訳がないだろ？

世界一の美貌と世界一の優しさと世界一の頭脳と世界一のプロポーションを持つ智代が失敗するなんて……果たしてあるだろうか？
ある訳がない！ 反語おおおおおお！……
だから、俺が失敗の可能性を考慮するなんて有り得ないのだ。
いや、そんなことはどうでも良いのだ。
別に昼飯食わなくても死ぬ訳じゃないからな。

が、これを食べないという選択肢を選べば智代を悲しませてしまうかも知れない……それだけは絶対に避けたい。
……。

元より選択肢なんて一つしかないのだ。
俺は覚悟を決めて……。

誰かが俺の腕を揺さぶる。

「おい、大丈夫か？ しつかりしな」

世界一愛しくて大切な人の顔が俺の視界に映る。今までのは夢だったのかな?

そりやそうだよな! 智代が失敗する訳がない。が、現実は何処までも残酷だった。

「やっぱり、夢じやないのか……」

智代が目を細めて、俺を避難する目で睨む。

「……うう、酷いぞ。た、確かに失敗作だが……そんな嫌そうな顔しなくても良いじゃないか」

や、普通の反応じやねえ?

「だつて……」

「ふん、そんなに嫌なら食べるな!」

智代が怒鳴る。そして眉を下げて、力なく肩を落としてしまう。このままじや駄目だ!

「誰も食べないなんて言ってないだろう!」

「……無理するな。これは私が食べる。失敗したのは私の責任だからな」

「や、腹壊すから止めれ」

……あ、俺ナニ言つてんの? 馬鹿なの? 死ぬの? バッドE

D直行なの?

「……そ、そこまで言うか。いくら何でも酷すぎるだ」

諦めちゃ駄目だ、諦めちゃ駄目だ。まだ希望はあるぞ!

や、智代は美人だから胃が纖細だろ? だから……」

「……」

智代はほんのりと頬を赤く染める。

「それにコレは俺のモノだつ!」

ごめん、コレを料理と呼ぶのはどう考へても無理です。

「……嫌なんだろう?」

「うん、どう考へても危険だしね」

正直、食べたくないです。人間だもの仕方ないよね。

「ツ……だつたら!」

智代は弁当箱を床に叩きつけようとする。皿がうつすりと潤んでいる。

「ま、待て！ 人の話は最後まで聞けとならわなかつたのか！？」

「つるさい！」

智代は今にも泣き出してしまいそうな顔をしている。

「それでも、俺はソレを食べたい」

愛する人には笑つっていて欲しいのだよ。そのためならば命すら余裕で賭けるさ。

「え？」

「だつて、ソレは智代が俺のタメに作ってくれたものだろ？？」

「……うん。ぐつちへの愛を込めて作った」

愛か、ならば俺は何があるうとソレを食べなければならない。我が愛は何人たりとも邪魔出来ないのだから！

俺は智代から弁当を奪い返す。そして、墨を口に運ぶ。

「……」

くちゅくちゅ固い、歯が折れるかも知れない。なあ、智代お前はどんだけ焦がしたんだ？

「どうだろうか？」

智代が期待と不安が混じる目で俺を見つめる。

味？ そんなの聞くまでもないからな。苦味しかねえーよ！

無論、そんなことを言える訳がない。

死にたくないから？

え、馬鹿なの？ あんなに可愛い智代が暴力なんかする訳ないだろ、常識的に考えて！

理由は愛する人の悲しむ顔をみたくないからに決まってるからな。

「……個性的な味だな」

ちょっと酷い言い方かも知れないな。美味しいと嘘をついてやるのが優しさのかも知れないな。

でも、それは残念ながら出来ない。

嘘を吐くと智代に怒られるからな……。

え、お前は嫁さんの尻に敷かれるタイプ？

いえ、亭主関白です。……でも、智代の尻になら敷かれたいかも。

変態じゃありません。仮に変態だとしても、紳士な変態さ。

「……そうか……不味いなら無理して食べなくて良いぞ」

智代はこの世の終わりみたいな感じで落ち込む。

「でも、胸に何か暖かいモノを感じるよ。智代が俺のために頑張つてくれたのが何よりも嬉しい」

俺は何とか墨を食べおえた。癌になつたらどうしようつ……。

とりあえず喉が渴いたな。

「何か飲み物ないか？」

「暖かい日本茶ならあるぞ」

智代は鞄から水筒を取り出して、コップにお茶を注ぎ俺に渡す。

「ありがとう」

俺はお茶を飲む、喉が潤う。
さて、次は……。

「……」

やつと、危険物を食べおえたぜ。後はサラダだけだな。俺はサラダを口に運ぶ。

「どうだろうか？」

「普通に上手いよ」

「そうか……良かつた」

残りのサラダを食べる。

「ま、まさかこれは！？」

口に広がる圧倒的な苦味と、不快な食感。

俺は正体を確かめるために吐きだした。

頼むから、俺の勘違いであつてくれ！

「な、なぜ全人類の敵が……」

「何時からピーマンが人類の敵になつたんだ？」

「人類が生れた時からの敵だろ。こんなのに食える訳がない、JK

なのに、ソレを食べさせるなんて……智代は俺に何か恨みがあるのか？

「ピーマンは健康に良いんだぞ」

だから、何なの？

「他で補えば良いじゃん」

「好き嫌いはよくないぞ。第一、私が料理作つたら食べててくれる約束じゃないか」

「ぐぬぬ……」

アレは料理じゃない！

とは、流石に言えず……俺は我慢して敵を食べた。
やつと、全て食べ終わつたぜ。

「ごひそひさま」

俺頑張つたよね？ もつ、ゴールしても良いよね……。
視界が全て真っ白に染まり、全身から力が抜けていく。

視界には何故か見覚えのある、天井が映る。

だから、ここが保険室だと分かる。

何故わかるのかつて？

……察しろ。

視界に天井が映るということは寝ていてる可能性が高いな。
今までの状況を考えて俺は気絶していたと推察出来る。
「良かつた……田が覚めたんだな。急に気絶したからびっくりした
んだぞ」

言つまでもないが……原因は間違いなくお前だからな。
無論、口には出さないがな。

「その……また弁当を作つてきたら食べてくれるだろ？ つか？」

だが、断わる。

「と、当然だろ」

智代の顔を曇らせないためなら、どんな苦難も受け入れると誓つたからな。

誤解するなよ、俺はMじゃない！

愛だよ、愛。

視点変更

今は授業中だ。

正直かなり眠い。昨日寝てないからな。

もし、睡眠が許されるなら私は直ぐに爆睡するだろう。

だが、残念ながらそれは叶わない。

休み時間を利用して保険室で寝れば良いのだが……もし、ぐっちは訪ねてきたらと思うと……。

結局、ぐっちは訪ねてこなかつたがな！…………こんなことなら保険室に行けば良かった。

昼休み。

私はぐっちの教室に居る。

「弁当作ってきたぞ」

「マジ！？」智代の弁当k t k r

喜んでくれてる……頑張つて作つて良かつた。

「開けて良い？」

「うん」

ぐっちは弁当の蓋を取る。

「……」

ぐっちが突然フリーズする。

「おい、大丈夫か？ しつかりしろ」

「やつぱり、夢じやないのか……」

ぐっちはこの世の終わりみたいな顔をする。

「…………うう、酷いぞ。た、確かに失敗作だが……そんな嫌そうな顔しなくても良いじゃないか」

眠いけど……喜んでもらいたくて頑張つて作ったのに……。でも、失敗作だから仕方ないか。

「だつて……」

「ふん、そんなに嫌なら食べるな！」

悪いのは、私だ。でも、眠いから今の私はかなり機嫌が悪い。だから……。

「誰も食べないなんて言つてないだろ？！」

「……無理するな。これは私が食べる。失敗したのは私の責任だからな」

ぐつちは優しいから私を落胆させたくないで無理してるんだな。

……でも、本当に無理しないで良いんだ。本当に本当だぞ。

「や、腹壊すから止めれ」

……わ、私の作った料理は危険物だったのか。

「……そ、そこまで言うか。いくら何でも酷すぎるぞ」

「や、智代は美人だから胃が繊細だろ？だから……」

「……」

び、美人？ お世辞でも嬉しいぞ。

「それにコレは俺のモノだつ！」

「……嫌なんだろ？」

「うん、どう考へても危険だしね」

「そうか……」

「ツ……だつたら！」

私は弁当箱を床に叩きつけようとする。穴があつたら入りたいぞ。

「ま、待て！ 人の話は最後まで聞けとならわなかつたのか！？」

「うるさい！」

「それでも、俺はソレを食べたい」

「え？」

「だつて、ソレは智代は俺のタメに作つてくれたものだろ？！」

「……うん。ぐつちへの愛を込めて作つた」

沢山込めたぞ。

ぐつちは私から弁当を奪う。そして、卵焼きを口に運ぶ。

「……」

ぐつちは無言で噛み始める。

「どうだろうか？」

もしかしたら……。

「……個性的な味だな」

そ、それはどういう意味なんだ？

……。

「……そうか……不味いなら無理して食べなくて良いぞ」「やつぱり駄目だったか。

「でも、胸に何か暖かいモノを感じるよ。智代が俺のために頑張ってくれたのが何よりも嬉しい」「ぐつちの優しさが嬉しい。

「何か飲み物ないか？」

「暖かい日本茶ならあるぞ」

私は鞄から水筒を取り出して、コップにお茶を注ぎ俺に渡す。

「ありがとう」

ぐつちは喉を鳴らしながらお茶を飲む。よっぽど喉が渴いていたのだろう。

「……」

ぐつちはサラダを口に運ぶ。

「どうだろうか？」

「普通に上手いよ」

「そりゃ……良かった」

ぐつちが残りのサラダを食べる。

「ま、まさかこれは！？」

ぐつちはピーマンを吐きだした。

「な、なぜ全人類の敵が……」

「何時からピーマンが人類の敵になつたんだ？」

「人類が生まれた時からの敵だろ。こんなのに食える訳がない、JK

JK……誰かの名前か？」

「ピーマンは健康に良いんだぞ」「だから、食べる。

「他で補えば良いじゃん」

「好き嫌いはよくないぞ。第一、私が料理作つたら食べてくれる約束じゃないか」

約束を破るのか？

「ぐぬぬ……」

ぐつちは残りの料理を無言で食べる。

「うひそりやま」

そう言つてぐつちが何故か気絶した。

私はぐつちを保険室に運び、ベットに寝かせる。
数分後……。

「良かった……旦が覚めたんだな。急に気絶したからびっくりした
んだぞ」

本当にびっくりしたんだからな。

「その……また弁当を作つてきたら食べててくれるだろうか？」
ぐつちに喜んで貰えるような料理を作りたいんだ。だから……暫くは大変だと思うが付き合つて欲しい。

「と、当然だる」

良かつた。頑張つて料理作るからなー！

因みに彼女の料理の腕が上がるまで数カ月もかかることになるのは内緒の話だ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8763m/>

もう1つの智代アフター

2011年2月3日00時40分発行